國立臺灣大學日本語文學系

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature
College of Liberal Arts
National Taiwan University

Master Thesis

吉川英治『三国志』とその底本の比較研究
——人物像を中心に——

The Comparison of Eiji Yoshikawa's *Sangokushi* and the Original Books
——Focusing on its Characters——

楊妮潔
Ni-Chieh Yang

指導教授：陳明姿 博士
Advisor:Ming-tsu Chen, Ph.D.

中華民國 103 年 6 月
June 2014

國立臺灣大學碩士學位論文
口試委員會審定書

吉川英治『三国志』とその底本の比較研究
—人物像を中心に—

本論文係楊妮潔君（R99127001）在國立臺灣大學日本語文學系、所完成之碩士學位論文，於民國 103 年 6 月 30 日承下列考試委員審查通過及口試及格，特此證明

口試委員：陳明姿（簽名）

（指導教授）

川合康三

黃美娟

系主任、所長 陳明姿（簽名）

前書き

大学院に入った時から、日中比較文学の研究を志してきた。日中の文学を比較してその差異を見出し、日中民族の精神までその差異が出る原因を突っ込んでいくのがとても面白いことであり、また二つの言語ができる私たちのみ得られる快楽だと思うから。しかし、勉強不足のため、「吉川英治『三国志』とその底本の比較研究ー人物像を中心にー」というテーマを深く探求することはできず、実に残念に思う。それでも、吉川英治『三国志』の研究にほんの少しのヒントになれるなら、なりよりの光栄だと思う。この論文が完成できたのは、たくさんの人に協力を頂いたので、この場で感謝の意を表したい。

まず、指導教官の陳明姿先生に深くお礼を申し上げたい。大学院に入ってからは、ずっと先生にいろいろお世話になってきた。いつもドジを踏んでいる私のような学生は、先生にとってもとても大変だと思うが、先生はいつも微笑みながら私に優しく接してくれた。また、交換留学の際にも、先生が相談に乗ってくださったり、推薦状を書いてくださったりしてくれた。本当に、先生が大好きです。

そして、修士論文の審査にあたり、快く引き受けてくださった川合康三先生と輔仁大学の黄翠娥先生に、感謝の意を申し上げたい。川合先生から論文の方向性など示唆に富んだご意見をいろいろくださったこと、黄先生に論文構成の細かいところまで注意していただいたことで、論文を順調に書くことができた。

また、東京大学の齋藤希史先生と台湾大学日本語学科の先生たちに研究方法を基礎から教わり、学問の奥深さを知ることができた。この方々にも深謝を申し上げたい。

ほかに、そばにいてくれた友達に感謝したい。論文について助言してくれた花ちゃん、最後の院生生活をともに過ごした朱ちゃん、未来への勇気をつけてくれたキミ、ほかに名前をいちいち挙げるのはできないが、あなたたちが応援してくれたおかげで、私は今日まで頑張ることができた。

最後に、この論文を私の人生の一つののマイルストーンとして、私をいつも見守ってくれた親愛なる家族に差し上げたい。これからは一社会人として頑張っていくから、どうかこんな不器用な私をずっと応援してください。

2014 年 8 月

楊妮潔

日本語要旨

吉川英治『三国志』とその底本の比較研究
――人物像を中心に――

日本人にとって、「三国志といえば吉川英治」と言えるほど人気を得た吉川英治『三国志』(以下、「吉川『三国志』」と呼称)であるが、それは中国の『三国志演義』をそのまま翻訳したものではない。吉川氏がその序文においても述べているように、彼は中国の古典を一般人でも楽しめるように長編化し、その中に登場する人物も原作のままではなく、私的な発想による新しい解釈を加えたものとなっている。特に、日本に曹操ファンが多いのも本作の影響が大きい言われているからこそ、吉川『三国志』が掲示した人物像に対する理解を深めなけらばならない。実際、吉川氏は中国の『三国志演義』をそのまま底本にしたのではなく、日本語に訳されたものを読んでから吉川『三国志』を創作したため、本論文ではこの介在されている底本を吉川氏が人物像を作り上げる時の要因として取り扱ってみた。それを前提として、底本との比較を通じて、吉川『三国志』の人物像と新しい人物像が持つ意義について考え直した。

第一章では、吉川『三国志』の創作の際に使う底本について考察した結果、『李卓吾先生批評三国志』(以下、「李卓吾本」と呼称)・湖南文山の『通俗三国志』・吉川『三国志』を本論文で取り扱う材料にしていた。

第二章では、「成立と時代背景」と「人物像」という二つの部分からて吉川『三国志』の創作について考察していた。「成立と時代背景」では吉川氏の歴史小説の創作態度と、氏の中国渡航経験と戦争思想について考察してきた。「人

物像」の部分では、魏・蜀・呉から代表的な主君と軍師を一人ずつ選んび、底本との比較を通じて吉川『三国志』の人物描写を分析した。
結論として、『通俗三国志』の介在は氏の人物造形に大きな影響を与えていなかったことがわかった。しかし、中立的に人物を取り扱っている「李卓吾本」を受け継いだ『通俗三国志』を底本にしていたから、氏は特定人物の両面性を読み取る事ができ、独特な人物像を創作することに到達した。

キーワード：日中戦争、中国体験、『李卓吾先生批評三国志』、『通俗三国志』、戦争思想、歴史小説、読者意識

中国語要旨

吉川英治『三國志』及其底本的比較研究
——以人物形像為中心——

對日本人來說，「說到三國演義就是吉川英治」般的人氣作品——吉川英治『三國志』(以下，簡稱為「吉川『三國志』」)，其實並非直譯中國的『三國演義』。如同吉川英治在序文裡所言，他將中國古典改編成一般人也能欣賞的長篇作品，其中的登場人物也並非無異於原作，而是以個人的構思加以新的解釋。特別是如同雜喉潤(2002)所指出，日本之所以有為數眾多的曹操迷也是起因於本作品；所以我們有必要增加對吉川『三國志』人物形象的理解。又，吉川英治並非直接以中國的『三國演義』為底本，而是閱讀日文譯本後才進行吉川『三國志』的創作，因此本論文也將該日文譯本視為吉川英治人物形象創作時的一大因素。以此為前提，藉由與底本較為詳細的比較，重新思考吉川『三國志』的人物形象及其意義。

在第一章，考察了吉川『三國志』創作時所用的底本，決定以『李卓吾先生批評三國志』、湖南文山的『通俗三國志』、吉川『三國志』作為本論文處理的材料。在第二章，從「成立與時代背景」與「人物形像」兩部分來分析吉川『三國志』的創作。在「成立與時代背景」，探討了吉川英治的歷史小說創作態度、與其中國經驗及戰爭思想。在「人物形像」的部分，分別從魏、蜀、吳中各選出一位主君與軍師，藉由與底本的比較分析吉川『三國志』的人物描寫。

本論文發現，使用『通俗三國志』為底本並未給吉川英治的人物造型上造成重大影響。但是，因為『通俗三國志』繼承了『李卓吾先生批評三國志』相對中立地對待人物的態度，所以吉川英治能看透特定人物的兩面性，從而創作出獨特的人物形象。

關鍵字：中日戰爭、中國體驗、『李卓吾先生批評三國志』、『通俗三國志』、戰爭思想、歷史小說、讀者意識

英語要旨

The Comparison of Eiji Yoshikawa's *Sangokushi* and the Original Books

——Focusing on its Characters——

Abstract

In Japan, Eiji Yoshikawa's *Sangokushi* (*Yoshikawa Sangokushi*) is such a popular work that when we think of Sangokushi and it comes to Eiji Yoshikawa. However, *Yoshikawa Sangokushi* is not a word-for-word translation of the Chinese classical literature, Romance of the Three Kingdoms. According to the preface, he adapted this Chinese classical literature into a full-length novel that makes everyone appreciate it easily, and those characters are not just the original ones but interpreted with his own ideas. Meanwhile, it is said that because of this work, there are so many fans of SOUSO in Japan. Thus make it necessary for us to enhance our understanding toward the characters in *Yoshikawa Sangokushi*. However, instead of using the Chinese version of Romance of the Three Kingdoms as the original book, he used the Japanese translation version to conduct his work. Therefore, this thesis compared *Yoshikawa Sangokushi* with the Chinese version and the Japanese version.

Chapter 1 investigated the original books, and determined to use *The Criticism of Romance of Three Kingdoms by Li Zhuowu* and Bunzan Konan's *Tsuzokusangokushi* as the subjects of this thesis. Chapter 2 analyzed the creation of *Yoshikawa Sangokushi* from two parts. The first part, the situation and back ground of the

composition, examined Eiji Yoshikawa's attitude toward the creation of historical novels, his experiences in Chinese and his thoughts on Second Sino-Japanese War. The second part, the images of characters, analyzed images of six characters by comparing them with those in the original books.

In conclusion, this thesis found out that using Tsuzokusangokushi as the original book didn't affect Eiji Yoshikawa's creation of characters. However, Tuszokusangokushi took over the relatively neutral attitude of *The Criticism of Romance of Three Kingdoms by Li Zhuowu* toward characters, which made Eiji Yoshikawa look through the two sides of specific characters and create unique images of those characters.

Key words:

Awareness of readers, Chinese experiences, historical novels, Second Sino-Japanese War, *The Criticism of Romance of Three Kingdoms*, thoughts on wars, *Tsuzokusangokushi*

目次

論文口試委員審定書.....i
前書き.....ii
日本語要旨.....iv
中国語要旨.....vi
英語要旨.....viii
目次.....x
凡例.....xii
序論.....1
1. 研究動機.....1
2. 先行研究.....3
2.1. 曹操に対して.....3
2.2. 劉備に対して.....4
2.3. 関羽に対して.....4
2.4. 諸葛亮に対して.....5
3. 研究目的.....6
本論.....7
1. 吉川英治『三国志』とその各底本の概説.....7
1.1. 吉川英治『三国志』.....7
1.2. 湖南文山の『通俗三国志』.....9
1.3. 久保天随の『新訳三国志』.....10
1.4. 吉川英治『三国志』創作において使う底本.....11
2. 吉川英治『三国志』の創作.....13
2.1. 吉川英治『三国志』の成立と時代背景.....13
2.1.1. 吉川英治『三国志』の成立.....13
2.1.1.1. 読者意識.....13
2.1.1.2. 歴史小説としての成立.....14
2.1.2. 時代背景.....22
2.1.2.1. 日中戦争期で書かれた吉川『三国志』.....22
2.1.2.2. 書き換えられた吉川『三国志』の序文.....24
2.1.2.3. 吉川英治の戦争思想.....25
2.1.2.4. 吉川英治の中国体験と『三国志』創作.....28
2.1.2.5. 吉川英治の戦争思想と『三国志』創作.....30
2.2. 吉川英治『三国志』の人物像.....34
2.2.1. 主君たち.....34

2.2.1.1. 曹操 34
2.2.1.1.1. 曹操の初登場と容貌描写 34
2.2.1.1.2. 曹操の死の描写 38
2.2.1.1.3. 曹操像に対する加筆 40
2.2.1.1.4. 曹操像が持つ意義 44
2.2.1.2. 劉備 46
2.2.1.2.1. 劉備の初登場と容貌描写 46
2.2.1.2.2. 劉備の死の描写 48
2.2.1.2.3. 劉備像に対する加筆 50
2.2.1.2.4. 劉備像が持つ意義 53
2.2.1.3. 孫権 54
2.2.1.3.1. 孫権の初登場と容貌描写 54
2.2.1.3.2. 孫権像に対する加筆 56
2.2.1.3.3. 孫権像が持つ意義 59
2.2.2. 軍師たち 60
2.2.2.1. 司馬懿 60
2.2.2.1.1. 司馬懿の初登場と容貌描写 60
2.2.2.1.2. 司馬懿像に対する加筆 62
2.2.2.1.3. 司馬懿像が持つ意義 67
2.2.2.2. 諸葛亮 69
2.2.2.2.1. 諸葛亮の初登場と容貌描写 69
2.2.2.2.2. 諸葛亮の死の描写 71
2.2.2.2.3. 諸葛亮像に対する加筆 72
2.2.2.2.4. 諸葛亮像が持つ意義 75
2.2.2.3. 周瑜 78
2.2.2.3.1. 周瑜の初登場と容貌描写 78
2.2.2.3.2. 周瑜の死の描写 78
2.2.2.3.3. 周瑜像に対する加筆 81
2.2.2.3.4. 周瑜像が持つ意義 82
結論 84
参考文献 88

凡例

本論文で扱うテキストは、以下の通りである。引用時も以下のテキストを用いる。

国立政治大学古典小説研究中心編『李卓吾先生批評三国志』（1）～（20）（台北：天一出版社、1985 年 10 月）

大橋新太郎編『校訂通俗三国志』（上）（下）（東京：博聞館、1910 年 2 月、13 版）

吉川英治『三国志』（一）～（五）（東京：講談社、2008 年 10 月、新装版）：吉川英治歴史時代文庫 36『三国志（四）』・37『三国志（五）』（1989 年 4 月刊）を底本とした。

また、吉川英治『三国志』の「序文」と「篇外余録」は、以下のテキストを用いる。
吉川英治歴史時代文庫『三国志（一）』（東京：講談社、1989 年 4 月）
吉川英治歴史時代文庫『三国志（八）』（東京：講談社、1989 年 5 月）

なお、本論文では、附言なく『三国志演義』と書く場合、羅貫中の『三国志通俗演義』を指す

序論

1. 研究動機

中国明初の羅貫中の編である『三国志演義』は、中国文学史上初めての長編小説であり、四大奇書の一つとして広く愛読されている。歴史書の『三国志』やその他民間伝承を基とし、唐・宋・元の時代にかけてこれら三国時代の三国の争覇を基とした説話が好まれ、その説話を基として成立した。波乱万丈のストーリーと英雄豪傑の描写に成功したため、時代と国境を越え、多方面にわたってその影響力は及んでいる。日本においての『三国志演義』は江戸時代から人気を呼び始め、現在でも異なるメディアによって作品の世界に触れることができる。特に、第二次世界大戦後の日本では「三国志」ブームが何度も訪れた。

その中で、昭和後期以降でのメディア作品では、吉川英治の小説『三国志』(以下、「吉川『三国志』」と呼称)を基調に、大河作品漫画化した横山光輝『三国志』や NHK で放送された人形劇『人形劇三国志』などが高い評価を受けたため、吉川『三国志』を直接読まなくても、異なるメディアで間接的に吉川『三国志』を接しているのが実相となっている。

しかし、この吉川『三国志』は『三国志演義』をそのまま翻訳したものではない。吉川がその序文においても述べているように、彼は中国の古典を一般人でも楽しめるように長編化し、その中に登場する人物も原作のままではなく、私的な発想による新しい解釈を加えたものとなっている。

「三国志といえば吉川英治」と言われているほど人気を得た吉川『三国志』であるからこそ、我々はこの作品の重要性を重視しなければならないと思う。特に、「とりわけ曹操ファンを飛躍的に増やしたのは、吉川三国志である」[1]と

[1] 雑喉潤『三国志と日本人』東京：講談社、2002 年、53-154

雑喉潤（2002）が言っていることから、吉川『三国志』が掲示した人物像に対する理解を深めなければならないと思い、本論文を書こうとした。

2. 先行研究

吉川『三国志』に対する研究は多いとは言えない。以下、吉川英治『三国志』の登場人物についての先行研究を整理してみる。

2.1. 曹操に対して

雑喉潤（2002）[2]は、吉川氏がほかの人物より曹操に対する人間分析が作品の中に最も多く現れると述べ、吉川氏の曹操への恋にさらに着目した。その現れとして、優秀な人材、例えば関羽や趙雲への切なる思いが挙げられた。従って曹操の死ぬ場面にも、多くの紙数を割いているという。

邱岭、呉芳齢（2006）[3]は、吉川氏が作中人物の口を借りずに、吉川氏が叙述者としてそのまま曹操に対する評論を述べた点と、さらに、社会・政治という視点から離れ、一人間として曹操を理解してきた点に注目した。

箱崎緑（2010）[4]は、戦後のほかの三国志の再話と比べ、以下の結論に到達した。弓館版・岡本版『三国志演義』の「語り手が『三国志』演義を自由に語る中で、当時の価値観に基づいて気侭に筆を走らせた結果、曹操に対する高評価と劉備への批判が生まれているようだ。」また、「意識的に曹操の描き方を変えたように読め、再話世界を豊かにしたという点で、確かに吉川版に多大な功績があると言えるだろう。」

江尚軍（2013）[5]は、吉川氏が描く曹操を性格・戦争・精神面から分析、吉川氏の曹操謳歌に気づいた。また、曹操の性格を「素朴な曹操」と、「温雅典

---

[2] 雑喉潤『三国志と日本人』東京：講談社、2002 年
[3] 邱岭、呉芳齢『三國演義在日本』銀川：寧夏人民出版社、2006 年
[4] 箱崎緑『日中戦争期における「三国志」ブームー中国は如何に語られたかー』東京：東京大学修士学位論文、2010 年
[5] 江尚軍「吉川英治『三國志』と『三國志演義』の比較―曹操像を中心に」『西江月』2013：2、重慶：重慶大學外國語學院、2013 年

麗な曹操」という二つの場面から探求した。

2.2. 劉備に対して

劉備の人物像は他の人物と比べて蒼白に見えるが、吉川は細部の描写によりその人物像を豊かにしたと王米娜（2013）[6]が述べた。劉備の地味な家、優しい母親、母親との対話から、哀れな雰囲気を醸し出し、いつか王になるイメージを作り出した。これは日本武士の「悲情美」にふさわしく、日本読者から見ればより一層受け入れられやすいように加筆したものである。また、吉川は鴻芙蓉という原作にない女性との恋愛により、劉備に風雅のイメージをつけた。これは平安時代からの恋愛描写を引き継ぎ、劉備を日本の読者に魅力的に見せるためである。総合的に言えば、吉川は劉備を非常に肯定的に捉えていると王氏が述べた。

2.3. 関羽に対して

雑喉潤（2002）[7]は吉川『三国志』が関羽に冷たいと評した。しかし、桃園に義を結ぶ三人を主人公中の主人公にしたい吉川氏の思い入れがうかがわれる指摘した。（それにしても、曹操への思い入れと比べたら薄く感じると雑喉氏も述べた）

邱岭（2006）[8]は吉川氏が仁、智、勇の三徳をそれぞれ劉、関、張に与え、ひとつの理想的な集団として描いたと述べた。しかし、諸葛亮の智と違い、関羽の智は修養、人徳などの精神面に見られる。その儒者としての智を強調する

[6] 王米娜（2013）「談吉川英治「三國志」中的劉備形象」黑龍江：『北方文學』
[7] 雑喉潤『三国志と日本人』東京：講談社、2002 年
[8] 邱岭「試論日本文學對《三國演義》的接受——以吉川英治《三國志》中的關羽形象為例」福建師範大學學報 2006-3、2006 年

ために、関羽は武夫から塾の先生になり、作品の中随所にその博識を示した。

また、吉川氏が関羽の死から日本民族の審美観に応じるものも発見した。それは、関羽の最後の旅が無情の感に満ち、その死も格別に哀愁を誘うものである。この貴種流離のような日本伝統的な審美観を作品の中に導入するには、劉、関、張の出身を貴人にしなければならないと邱氏は考える。

2.4. 諸葛亮に対して

謝立群・張永（2011）[9]は吉川氏が描いた諸葛亮を「神格化されていない諸葛亮」――超自然の力を頼らず、自分の智慧に努力を以て敵に勝った者、「より人間らしい諸葛亮」――人間味のある行動をとるものという二つの面から見てきた。

[9] 謝立群・張永「『三国志』對『三国演義』中人物形象的塑造」『北京第二外國語學院學報』2011:12 、北京: 北京第二外國語學院學報、2011 年

3. 研究目的

今までの研究では、吉川『三国志』を取り上げてその人物像が加筆された意義について考えてきたが、羅貫中『三国志演義』や吉川が使った底本との比較は行われていない。従って、介在されている底本が吉川の人物像作りに影響を与えた可能性もすべての研究から排除された。よって、本論文ではあえてこの介在されている底本を吉川が人物像を作り上げる時の要因として取り扱ってみる。それを前提として、底本とのより詳しい比較を通じて、吉川『三国志』の人物像と新しい人物像が持つ意義を考え直そうとする。

本論文では主に以下の二点を問題として取り扱う。

一、吉川『三国志』と吉川が使った底本との比較を通じて、吉川が『三国志』においてどのような工夫によって、吉川独特の人物像を作り上げたかについて分析する。

二、吉川『三国志』と吉川が使った底本で現した人物像の差異は日本人と中国人の文化思想に関係するのか、あるいは何に影響されたのか。また、この新しい人物像はどのような意義を持っているかについて考察する。

本論

1. 吉川英治『三国志』とその各底本の概説

1.1. 吉川英治『三国志』

吉川英治『三国志』は、新聞連載小説として中外商業新報（現・日本経済新聞）などで昭和 14 年（1939）8 月 26 日付にスタートした。連載中、日中戦争が勃発したが、連載は続けられ、吉川氏は連載中の昭和 17 年（1942）には三度目の訪中で華南地方を旅行していた。そして、昭和 18 年（1943）9 月 5 日付で連載が終了した。連載終了後、『三国志』は複数の出版社から単行本として刊行された。最初の単行本（全一四冊）の刊行は大日本雄弁会講談社（現講談社）より昭和 15 年（1940）5 月から昭和 21 年（1946）9 月にかけて行われている。それから様々な版本が出版されたが、管見の限り序文にしか大きな変更は行われていなかった。

吉川英治は、『三国志』の序で以下のように述べている。

> 原本には「通俗三国志」「三国志演義」その他数種あるが、私はそのいずれの直訳にもよらないで、随時、長所を択（と）って、わたくし流に書いた。これを書きながら思い出されるのは、少年の頃、久保天随氏の演義三国志を熱読して、三更（こう）四更（こう）まで燈下にしがみついていては、父に寝ろ寝ろといって叱られたことである。（「序」）

従来の研究によると、この「通俗三国志」は湖南文山の『通俗三国志』を指し、「三国志演義」は久保天随の『新訳演義三国志』を指している。また、「そ

のほか数種」と書いてあるが、これらは特定し難いものになっている。底本の先行研究に関しては、後の 1-4.「吉川英治『三国志』の底本に関する先行研究」でまた説明する。なお、湖南文山の『通俗三国志』と久保天随の『新訳演義三国志』に関しては 1-2、1-3 で説明する。

雑喉潤（2002）[10]は、吉川『三国志』の特徴について、吉川氏の独自な創意――桃園に義を結ぶ三人に対する加筆、すぐれた人間分析、曹操と諸葛亮の重視、「怪力乱神」をかたらぬ点、吉川の史観とその時代性を述べた。

箱崎緑（2010）[11]は、今まで（2010 年時点）吉川『三国志』が評価されてきた特徴を六点にまとめ、戦時体制下の他の三国志の再話との違いを探求した。吉川『三国志』の独自性として、語りものとしての性格、特に丁寧でありながら平易な語り口から読者を啓蒙する点が挙げられ、共通点として、「合理化」、「簡略化」、「中国理解言説の反映」、「時局の反映」[12]が挙げられた。また、箱崎氏は格別に「曹操の造形」を独立して分析した。

邱岭、呉芳齢（2006）[13]は、吉川『三国志』の特徴を、「真実性の発展」、「社会性の除外」、「叙情性の増補」という三つの方面から探求した。「叙情性の増補」においては人物に対する吉川氏の加筆から日本文学の「悲美」の伝統がいかに吉川『三国志』の中に用いられたかについて説明した。

童華仁（2011）[14]は、中国描写と、他の比喩と視点から原著を解釈という二点から吉川『三国志』の特徴を捉えた。前者に関しては、「中国多元民族に対

---

[10] 雑喉潤『三国志と日本人』東京：講談社、2002 年

[11] 箱崎緑『日中戦争期における「三国志」ブームー中国は如何に語られたかー』東京：東京大学修士学位論文、2010 年

[12] 「時局を反映したと思われる似たような表現が複数の再話に見られる場合もある。吉川版、岡本版共に、南蛮に対する諸葛亮の姿勢を称賛しているが、多民族と協調しようという大東亜共栄圏の思想と相通じる点があるためだと考えられる」。また、「吉川版は、日本の精神が価格力と融合し力を発揮するという考え方を示しており、科学力と同時に、機械を扱う人間の精神を重視しているようだ」と述べ、『三国志』からそれを反映する例文を引いた。以上を踏まえたうえに、「加えて吉川版は、連載小説という性格から、本文の流れに時局を映していたと考えられている」と箱崎緑が評価した。

[13] 邱岭、呉芳齢『三國演義在日本』銀川：寧夏人民出版社、2006 年

[14] 童華仁『從歷史教訓到文化消費ーー在日本「三國志」文本中變遷的中國』高雄：国立中山大学修士学位論文、2011 年

する描写」、「中国歴史に対する描写」、「中国地理に対する描写」、「中国文化に対する描写」、後者に関しては、「人物に対する評価」、「故事の説明や日本の故事で解釈」、「現代的な角度から解釈」、「一般大衆の角度から解釈」の増補が挙げられた。

1.2. 湖南文山の『通俗三国志』

『通俗三国志』に関しては未解明の点が多々残される。成立は元禄二（一六八九）年から五（一六九二）年であり、訳者は湖南文山とされるが、この人物の正体に関しては未だ不明である。吉川英治記念館には、吉川氏が使う東京・博聞館が刊行した帝国文庫版『通俗三国志 上・下巻』（明 26-27）（しかし、作者は高井蘭山と誤植された）が所蔵されている。

『通俗三国志』の底本は、『三国志演義』の数ある版本の内、『李卓吾先生批評三国志』(以下、「李卓吾本」と呼称)と称される系統のものである。これは久保天随の『新訳演義三国志』の序文と、幸田露伴校『通俗三国志』の「解題」でも言及されている。また、「李卓吾本」が『通俗三国志』の底本である根拠として、小川環樹（1968）[15]は三国志演義の版本を三種類にまとめて、關索説話の挿入・「關索荊州認父」の一段[16]の欠如・標題の類似性・さらに文山訳は李卓吾本の誤字[17]をそのまま引き継ぐ点から、文山訳のよりどころとなったのは李卓吾本であると定めた。一方、立間祥介（2001）[18]は、湖南文山の『通俗三国志』が「嘉靖本」系のテキストを底本としたものであると指摘したが、そ

[15] 小川環樹「文山訳の原本」『中國小説史の研究』東京：岩波書店、1968 年
[16] 關索は『三国志演義』の中に関羽の次男として現れた人物であり、この人物が出てくるかどうか、どのように登場したかは版本によって違うので、版本研究の端緒となった。
[17] 小川環樹は『三国志演義』の異同を調べた結果、文山訳の「頭に日月の狼とう（「髟」の下に「頭」）帽」で「とう（「髟」の下に「頭」）」という漢字を使ったが、この漢字を使ったのは李卓吾本だけで、ほかの各版本では「鬚」という漢字を使った。
[18] 立間祥介「吉川『三国志』の魅力」『国文学 ： 解釈と鑑賞』66：10、東京：至文堂、2001 年

の拠り所が明示されていない。また、「嘉靖本」には關索説話が挿入されていないことから、「嘉靖本」の底本は『通俗三国志』であるとは言い難い。

なお、『通俗三国志』の翻訳について、基本的には原文に対して忠実しているが、純然たる翻訳作品ではない。「『通俗三国志』の翻訳態度が逐語訳とは到底言えぬ、随意に補足・省略を含む自在なものであることは了解されるであろう。また、原文中の語彙が、いかなる形で訳されているのか確認し辛い場合もある」と指摘されている[19]。それで、長尾直茂（1997）[20]は、『太平記』などの軍記物に影響をうけた修辞が多用されているとも指摘した。また、田中尚子（2007）[21]は、「軍記に見られる表現の利用」「区切れの位置の移動」「話末評の増加」という三つの面からその翻案手法を検討する。

1.3. 久保天随の『新訳三国志』

この久保天随の『新訳三国志』とは、東京・至誠堂が刊行した新編漢文書第十二・十三編『新訳三国志上・下』（上は明治四十五年六月初版。下は大正元年十月初版）で、久保天随の序によると、清の毛声山が子の毛宗崗の名で刊行した『毛宗崗本』を底本としたものである。

そして、『毛宗崗本』の凡例には、「俗本謬託李卓吾先生批閲，而究竟不知出自何人之手，……」と書いてあることから、『毛宗崗本』は『李卓吾先生批評三国志』を底本にしたと推測された[22]。また、「物語の洗練を目指す明確な意図のもとに、底本を積極的に改めたことこそ、毛本独自の特徴なの」[23]であり、

---

[19] 長尾直茂「江戸時代元禄期における『三国志演義』翻訳の一様相――『通俗三国志』の俗語翻訳を中心として――」『国語国文』66：8、京都：中央図書出版社、1997 年

[20] 長尾直茂「江戸時代元禄期における『三国志演義』翻訳の一様相・続稿」『国語国文』66：8、京都：中央図書出版社、1997 年

[21] 田中尚子「通俗三国志試論」『三国志享受史論考』東京：汲古書院子、2007 年 1 月

[22] 中川諭『『三國志演義』版本の研究』東京：汲古書院、1998 年

[23] 竹内真彦「泣かずに魏延を焼き殺す--吉川英治の読んだ三国志」『アジア遊学』105　東京：勤勉出版 2007 年、16

文学作品としての完成度が高く、現在『三国志演義』の翻訳として販売されているもののほとんどは毛宗崗本を底本としている。

1.4. 吉川英治『三国志』創作において使う底本

吉川英治自身は、「少年の頃、久保天随氏の演義三国志を熱読」すると述べているが、従来の研究によると、吉川英治が主に用いる底本は、湖南文山の『通俗三国志』である。

これに関して、竹内正彦（2007）[24]は、

> その（『通俗三国志』の）刊行から吉川『三国志』が現れるまで、日本人にとって三国志とは『通俗三国志』であった。これは、吉川英治にとっても同様であり、彼が『三国志』を書く際に依拠してのもこの『通俗三国志』であったことは疑いない。

と述べ、さらに孔明が魏延を焼き殺そうとする挿話が吉川『三国志』、湖南文山の『通俗三国志』、『三国志演義』の「李卓吾本」という三つの説話にともにあるが、毛宗崗本には収録されていないことを述べた。すなわち、吉川『三国志』、湖南文山の『通俗三国志』、『三国志演義』の「李卓吾本」が一脈相通じていることが推測できるのである。

また、立間祥介（2001）[25]は吉川『三国志』の「蒼天已に死す、黄夫当に立つべし」が『通俗三国志』の「黄夫」[26]という誤記を踏襲した点から、吉川『三国志』は湖南文山の『通俗三国志』を底本として用いることについて説明する。

---

[24] 竹内真彦「泣かずに魏延を焼き殺す--吉川英治の読んだ三国志」『アジア遊学』105、東京：勤勉出版、2007 年、15

[25] 立間祥介「吉川『三国志』の魅力」『国文学 ： 解釈と鑑賞』66：10、東京：至文堂、2001 年、東京：至文堂

[26] 李卓吾本では「黄天」と記する。

本論文は、先行研究に従い、「李卓吾本」―『通俗三国志』―吉川『三国志』という関連性を踏まえた上、第二章で三作品の描写を取り上げ、その相互関係を具体的に探求してみたいと思う。

2. 吉川英治『三国志』の創作

2.1. 吉川英治『三国志』の成立と時代背景

2.1.1. 吉川英治『三国志』の成立

2.1.1.1. 読者意識

吉川『三国志』は「新聞小説」という形で発表された作品であり、いわゆる「大衆文学」である。日本の大衆文学とは、「昭和十年代にマス・メディアの成熟を基礎に成立した文学であり、厳密には歴史的用語であること、近世以来の話芸伝統を継承するが、現れとしてはマスコミ的性格を持ち、その対応のうちに推移した」。「基本的には、大量生産、大量伝達、大量消費を踏まえたマスコミ文学」[27]である。日本でマス・メディアが成熟するのは、関東大震災（大正 12 年（1923））の一、二年後である。大正 13 年（1924）1 月の大阪毎日、大阪朝日両紙の百万部突破、翌年 1 月刊の大衆娯楽誌『キング』（講談社）の創刊は、当時のメディアの状況を反映している。

ちょうど大正 10 年（1921 年）に東京毎夕新聞社に入った吉川英治は、関東大震災による東京毎夕新聞社の解散をきっかけに、作品を講談社に送り作家として独立した。大正 14 年（1925 年）より創刊された『キング』誌に連載し、初めて吉川英治の筆名を使った「剣難女難」で人気を得た。キング誌は講談社が社運をかけた雑誌であり、新鋭作家吉川英治はまさに期待の星になり、多大な読者を獲得した。吉川氏が戦前も戦後も膨大な「読者」を獲得し続ける原因は、常に「読者」を意識しながら書き続けてきたことであろう。

「日刊紙が百万部の大台を越え、月刊誌が七十五万部も売れる状態となれば、どうしても文学的洗練を経ない読者の興味に対応した文学的創造が必要となる。彼らは文学的な洗練度においては未熟かもしれないが、人生的経験は豊富

[27]尾崎秀樹「大衆文学の魅力」『国文学：解釈と鑑賞』昭和 59 年 12 月号、1984 年、7-8

な受け手なのである。その知的興味を満足させるためには、従来の身辺雑事的私小説では充分でない。人間社会の諸側面を映したロマンが求められる。その期待の応えて登場したのが、新興文学としての大衆文学だった」[28]と言われているように、マスコミを通じて発表する文学作品を書くなら、読者を満足しなければならないのである。

吉川氏の読者群を分析してみれば、以下の二つのグループに分けることができる。一つは都市部を中心とした新中間層であり、彼らは「この小説は面白いか、面白くないか、標題で、書出しの数行で、或ひは、挿絵や、ずつと見たページの字感（――こんな熟語はないが）で、もうおよそ知ってゐる。知識的にも、大衆の読者が育つて来たことは確かだが、さういふ感覚の特に、鋭敏になつたことは、何と言つても、出版の氾濫からであらう。」[29]と吉川氏自身が述べている。また、もう一つは、大衆社会状況以前の「庶民」というのは職人・実社会人・勤労青年などであり、今日の大衆というものをイコールと考えてはならない。今の大衆とは大組織の中の人々であるから。しかし、吉川自身の経歴や、たびたび都市の享楽階層に嫌悪を示していることなどから考えれば、後者の「読者」の方に、より親近感があつただろうと想像される。[30]また、庶民的なキャリアを持っている氏こそ、読者と多くの感覚を共有することができた。

2.1.1.2. 歴史小説としての成立

歴史小説を考えるとき、森鴎外が提出した歴史小説論が常に言及される。森氏によれば、歴史小説には歴史其儘と歴史離れという二つの創作法がある。前者とは、「資料に残され記録されている史実をそのままに小説として描く」。後

[28] 尾崎秀樹「大衆文学の魅力」『国文学解釈と鑑賞』昭和 59 年 12 月号、1984 年、7-8
[29] 吉川英治「歩く構想」『草思堂随筆』東京：新英社、1935 年
[30] 丸山浩「吉川英治と小林秀雄―「読者」「大衆」をめぐって―」山陽女子短期大学研究紀要 27、2005 年

者とは、歴史から離れ、「作者の自由奔放な〈といっても時代背景そのものや、史上人物を登場させた場合には、あまりにも実像と異なる人物解釈はできないはずだ〉イメージのままに新解釈のもとに小説として描く」という。しかし森鴎外自身は「歴史の小説の面白さというのは、やはり、歴史そのままでは生まれない」[31]と感じた。

「七実三虚」と言われているように、『三国志演義』は、歴史そのままと歴史離れという二つの創作法をうまく駆使したからこそ、読者を三国時代の中に引っ張ることに成功した。では吉川『三国志』はどうかというと、まず、氏の史実と物語創作について論じる「小説と史実」[32]から見てみよう。

> しかし小説を書く場合事実を拾い上げるに、もし事実というものの価値を非常に極端に考え過ぎたらば、所謂いい小説は書けない。そうかというて事実を軽蔑したら絶対にいけない。どんな空想にしても、それは正確に事実は事実として究明して、そうしてあらゆるものから推理的に突き進んでいく。つまり事実でなければならないという把握がなくちゃならないと思う。
>
> その基準は、要するに小説というものは、読んでいる読者の心理がこれは嘘だということが頭にぴんと来たらその小説は失敗と思う。だから作者がどんな空想を書いても、読者の頭の中には、どうあってもこれは事実であるという感じを持たすことが、小説というものの一つの使命というてよいと思う。

つまり、史実に捉われてはいけないが、史実を把握してから推理し、史実であるように読者に信じさせられる物語を作っていくという氏の歴史小説の創

[31] 武蔵野次郎「歴史・時代小説の魅力」『国文学：解釈と鑑賞』第 44 巻 3 号、1979 年、8
[32] 吉川英治「小説と史実」『折々の記』一家言叢書、全國書房、1942 年

作態度は羅貫中に近いと思う。吉川『三国志』を見渡して、歴史書を参考にしたところもあり、どの本にも書かれていない、氏の空想をさんざん生かすところもある。それは氏の言葉でいうと、「歴史の余白」というものに繋がっている。

（歴史の）要所要所の余白に対して、僕等は必ず零細な埋もれたものを拾い上げて、ここに僕等だけの世界を作り上げて行くのである

吉川氏が長けている創作テクニックを用いてこの「歴史の余白」を最大に生かした。それは例えば、「歴史の中で偶像化された存在が、ひとりの矛盾に満ちた人間、血肉の通った人間として読者の前に連れ出される」[33]という吉川氏が『私本太平記』で使った技法のように、吉川氏が『三国志』においても、この創作テクニックを駆使したので、作中に登場する英雄たちには人間的な弱さが持たされた。たとえば、沮喪の劉備は、

彼は、女々(めめ)しく郷里の母を想い出し、また、思うともなくい鴻芙蓉(こうふよう)の麗しい眉や眼などを、人知れず胸の奥所(おくが)に描いたりして、なんとなく士気の沮喪(そそう)した軍旅の虚無(きょむ)と不平をなぐさめていた。(「檻車」「桃園の巻」)

という感情を抱き、また、死に追い込まれる曹操が、

驕慢児(きょうまんじ)の眼にも、真実の涙が光った。脆(もろい)一個の人間に返った彼は、急

[33] 石川巧「権力の機構――『私本太平記』論」『国文学：解釈と鑑賞』66：10、東京：至文堂、2001 年

に五体のつかれを思い、喉の渇(かつ)に責められた。(「生死一川」「群星の巻」)

というように、英雄のイメージと異なる人間の弱さを現した。

「歴史の余白」にて物語世界を作り上げる手法として、人物の骨肉愛と恋を描くというのも挙げられる。鈴木貞美（2001）は、

> 彼は、歴史家の「余白」に関心に注ぎ、史書の記述や「史実」を相対化し、国際的な視野を取り入れたり、女性の役割を重視し、生活や文化史を重んじる態度を持ち合わせていた。それは「大衆小説」の戦略として、大衆を目覚めさせせような歴史上の人物を呼び返し、読者に史実らしく感じさせように叙述を工夫していったことと密接に関係している。[34]

というように、吉川作品の中に活躍している女性の描写を「大衆小説」の戦略と結びつけた。たとえば、吉川文学では、母と子との関係がいつも濃く描かれている。この濃密な母子関係描写は実際に吉川氏の人生反映ではないか。

吉川氏は昭和 32 年（1957）に、自叙傳『忘れ残りの記』を刊行した。そしてこの自叙伝について、傳馬義澄（2001）は以下のように語った。

> この自叙伝で語られているもうひとつの真実、それは幼年から青年に至る吉川英治とその母いくとの、ある濃い、粘着性の高い情緒である。それはほとんど肉感的なほど密接な関係であるという点において、きわめて日本的な母子関係であるといってもいい。（中略）吉川英治は、儒教的家族主義や儒教的良妻賢母主義を根幹とする女子教育観が時代を支配していた「明治の子」であり、藩士の末裔である両親もまた封建の遺風を生き、

[34] 鈴木貞美「吉川英治の歴史観」『国文学：解釈と鑑賞』66：10、東京：至文堂、2001 年、148

家族には封建的にしつけてきた（下略）[35]。

『忘れ残りの記』を見てみると、

母の闘いはもう十年になる。一家中心をしなかったのは不思議である。その点、母は全く強かった。だがその強さは冬柳のようなものだった。ただ忍受であった。子や良人へするように運命にも抵抗を知らなかった。無知といえば可憐なる無知の人であり、愛の一型とみれば、ただ子の涙を以て洗うしかない「家」なるものの犠牲碑だった。[36]

と書いてある。吉川氏は家を出ようとしたかった度に、母を思い出すと諦めた。このような骨肉愛は鈴木貞美（2001）に「英治の人と文学の原点」と評された。[37]

このような辛抱強い母親のイメージは、吉川『三国志』の中で、完全に虚構された劉備の母になり、

廊へ出てみると、そこの仕事場にだけ、うす暗い灯影がたった一つかかげてあった。その灯の下に、白髪の母の影が後ろ向きに腰かけていた。ただ一人で、星の下に、蓆を織っているのだった。

母は、彼が帰ってきたのも気がついていないらしかった。劉備がすがりつかんばかり馳け寄って、

「今、帰りました」

と顔を見せると、母は、びっくりしたように起ってよろめきながら、

「おお、阿備か、阿備か」

[35] 傳馬義澄「吉川英治の女性観」『国文学：解釈と鑑賞』66：10、東京：至文堂、2001 年、156
[36] 吉川英治『忘れ残りの記』東京：文藝春秋新社、1957 年
[37] 松本昭「吉川英治の魅力」『国文学：解釈と鑑賞』66：10、東京：至文堂、2001 年、11-12

乳呑み児でも抱きしめるようにして、何を問うよりも先に、うれし涙を眼にいっぱいためたまま、しばしは、母は子の肌を、子は母親のふところを、相擁して温(ぬく)め合うのみであった。(「桑の家」「桃園の巻」)

また、時には厳しく劉備に叱り、

「わたしは、そんな教育を、お前にした覚えはない。揺籃(ゆりかご)に入れて、子守唄をうとうて聞かせた頃から――また、この母が膝に抱いて眠らせた頃から――おまえの耳へ母はご先祖のお心を血の中へおしえこんだつもりです。――時の来ぬうちはぜひもないが、時節が来たら、世のために、また、漢の正統を再興するために、剣をとって、草廬(そうろ)から起たねばならぬぞと」

やはり劉備の母の造形には、母親に独特な感情を持っている吉川氏の成長の背景が影響を与えているのであろう。吉川氏に対する母親の重要性は、「故園」という劉備の母を描写する一章を吉川氏がわざと虚構した点からも見えるだろう。

また、先に言及した、歴史小説を書くときには「読者には嘘だと感じさせない」という工夫は、吉川『三国志』においては、「合理化」という手法として現した。

『三国志演義』にしばしば現れる妖術・魔術などの超人的な描写は排除しないと、現代読者は受け入れられない可能性がある。たとえば、三国志最大の見せ場となる赤壁の戦いの「東南の風」も、原作では孔明が道士服を着て祈ることで吹くことになっているが、本作では毎年この季節に 1、2 日だけ吹く貿易

風の存在を孔明が予測していたとしている。それは以下の章段である

「むかし、若年の頃、異人に会うて、八門遁甲(もんとんこう)の天書(てんしょ)で伝授されました。それには風伯雨師(ふうはくうし)を祈る秘法が書いてある。もしいま都督が東南の風をおのぞみならば、わたくしが畢生(ひっせい)の心血をそそいで、その天書に依って風を祈ってみますが――」と。

だが、これは孔明の心中に、べつな自信のあることだった。毎年冬十一月ともなれば、潮流と南国の気温の関係から、季節はずれな南風が吹いて、一日二日のあいだ冬を忘れることがある。その変調を後世の天文学語で貿易風(ぼうえきふう)という。(「孔明・風を祈いのる」「赤壁の巻」)

無論、これは諸葛亮の道教との関わりを無くした読み方であるが、現代の日本読者にはこのような解釈が施されると、わりと抵抗感がなくなる。

また、日本人には理解しがたそうな箇所があったら、吉川氏もちゃんと氏なりに説明した。たとえば、劉安が自分の妻を殺して、劉備に肉を提供したエピソードについて、物語の中に「読者へ」という欄を設け、「削除しようとも考えたが、あえて彼我の民情の相違を読み知ることができ、日本における鉢木の佐野源左衛門と最明寺時頼のエピソードと同様である」と解説した。現在の観念では受け入れられないエピソードがあっても、吉川氏はあえてそれを否定しない。手を加えて合理化するか、物語から出て解釈するかといういずれの手段によってこういうエピソードを削除せずにすむことができた。

なお、小説には、作者の道徳観・価値体系を持ち込むことが可能である。吉川文学の特色として、大衆性（庶民性）・教訓性・時代感覚が挙げられ、大衆性と時代感覚がなくなった現在までも吉川文学が読まれ続けてきたのは教訓

性そのものであろう。吉川文学に教訓性があるのは氏の明白な意図からのである。吉川氏は「大衆といふもの」で歴史物語を以て呼び水をさしたいと彼の創作意図を述べた。

> その大衆の中には、つまりこの國の民衆には、自然長い歴史と文化のうちに育まれてきたいいものが多分にある。それを私は小説のうちにも見出すのでありまして、何も、高踏的に讀者に與へるとか、民衆をひきあげるとかいふほどのものではありませんし、氣概をもつてもをりません。いはばひとつの“呼び水”であります。
>
> 呼び水といえばロマンな情調でも、人間感情の憎惡や批判でも、文學や詩はすべて呼び水作用のものでありますが、私もその方法をとつてすでに大衆の中にあるものへ、歴史物語をもつて呼び水をさしてゐるにすぎないのであります。[38]

作者が教訓を垂れる際には、作者の価値観がその中心に働いてる。たとえば、『三国志演義』では「義」・「忠」・「仁徳」・「統一」の価値が称えられていると言われている[39]。では、吉川氏が重視している価値は何かというと、「忠」と「孝」が挙げられるのであろう。氏は彼の価値観に関して以下のように述べた。

> 又、私は決して、思想運動家でもないし、教育者でもない。飽まで單なる一文人にすぎないのであるが、國民的詩人はいつも時代の先驅者である。國民の先に立つて道をさけんでゐた。文人が文に立つて道を語ること必ずしも異端ではあるまい。

---

[38] 吉川英治「大衆といふもの」『折々の記』東京：六興出版、1953 年

[39] 劍鋒「論『三國演義』藝術的道德美」『三國演義學刊』（一）、成都：四川省社會科學院出版、1985 年・余洪江「試論『三國演義』中的陸遜形象」『三國演義學刊』（二）、成都市：四川省社會科學院出版、1986 年

忠

の道に對して。又、餘りに舊道徳のうちに定義づけられてあるために却つて現代人のうちには顧慮されてゐない。

孝

の問題。[40]

「忠」も、「孝」も清新溌剌な將來への精神文化の信念でなくてはならないというのが氏の考えである。「孝」は前述通り、母子の感情を描写することで氏がいつも作品の中で賛美している。また、「忠」は『三国志演義』において異なる側面から見ると異なる定義を持っているが、吉川『三国志』においてはこの「忠」の価値を、死を以て蜀に尽くす諸葛亮で最大化にした。

2.1.2. 時代背景

2.1.2.1. 日中戦争期で書かれた吉川『三国志』

前にも言った通り、吉川『三国志』は今からおよそ 70 年前、昭和 14 年（1939）から昭和 18 年（1943）にかけて新聞連載のかたちで発表された。この時代は、1937（昭和 12）年を端緒とする日中戦争および太平洋戦争の真っ只中であった。わかりやすくするために、まず吉川氏の年譜[41]から、日中戦争とわりと関係あることを以下の年表にして並べてみる。また、年表に入っていなかったが、昭和 13 年（1938）の国家総動員法の成立や「東亜新秩序」の発表も作品の背景として含めて考えるべきであろう。

年代	事件

[40] 吉川英治「はしがき」『折々の記』一家言叢書、全國書房、1942 年
[41] 松本昭『人間　吉川英治』東京：六興出版、1987 年、318-320

昭和 12 年（1937）	日支事変起る。7 月、毎日新聞の特派員として天津・北京に行く約束を引き受ける。出発、即日の急なり。一ヶ月余にて帰国。
昭和 13 年（1938）	9 月、菊池寛、佐藤春夫、小島政二郎氏ら十数名と共に、ペンの部隊として南京、漢口方面に従軍。
昭和 14 年（1939）	『三国志』の執筆開始、土曜会各紙へ載る。
昭和 17 年（1942）	10 月海軍軍令部戦史部嘱託として、海軍機にて南方を一巡、12 月初旬帰る。朝日紙上に「南方紀行」を載す。
昭和 19 年（1944）	海軍戦史部より戦史執筆の依嘱あるも刊行企画の内示あるのみにて終わる。
昭和 20 年（1945）	終戦とともに一時執筆活動を休止。
昭和 22 年（1947）	執筆再開。

吉川氏は、昭和 12 年（1937）7 月に毎日新聞社特派員として天津・北京へ、翌年 9 月に、ペン部隊の従軍部隊の一員として漢口・南京方面と、二度中国を訪れた。特に、昭和 13 年（1938）の渡航に関して以下の資料が見られる。

（8 月 23 日）内閣情報部から文芸家協会についての相談があり、吉川英治もその懇談会に招かれて出席した。人選は文芸家協会の会長である菊池寛があたり、……二十二人が選ばれた。……作者を動員した意図は、漢口作戦に従軍させることで銃後文学の発展に寄与させようというねらいだったが、それほど強い要請ではなく、作家たちも比較的気軽に出かけた模様だ。[42]

[42] 尾崎秀樹『伝記　吉川英治』東京：講談社、1970 年

また、

> 昭和一三年八月に内閣情報部は文学者と懇談会を開き、漢口攻略戦への文学者の従軍を要請、それを受けて同年九月に陸海二班に分かれて二十数名に上る文学者が現地へと出発した。[43]

吉川氏と文芸家協会会長の菊池寛は親友の間柄であることから、吉川が「ペン部隊」の中心的に位置にいたことが推測できるだろう。

2.1.2.2. 書き換えられた吉川『三国志』の序文

現在の読者に読まれている吉川『三国志』の「序」は、初収本が刊行された昭和 15 年（1940 年）当時に書かれたものであったが、言葉遣いや、本作の執筆動機などに関して、再版時に変更された内容もあった。

言葉遣いとして、初収本では「支那」、「民族」と書かれているところは、改訂版では「中国」、「民俗」となり、「皇紀八百年頃」も「西暦百六十八年頃」となった。また、「この紙不足の折ながら」という言葉から、当時の社会状況も伺える。

吉川『三国志』の執筆動機に関して、現在我々が読んでいる序文では以下のように書かれている。

> 三国志は、いうまでもなく、今から約千八百年前の古典であるが、三国志の中に活躍している登場人物は、現在でも中国大陸の至る所にそのまま

[43] 長谷川泉『日本文学新史〈現代〉』東京：至文堂、1991 年

居るような気がする。――中国大陸へ行って、そこの雑多な庶民や要人などに接し、特に親しんでみると、三国志の中に出て来る人物の誰かしらときっと似ている。或いは、共通したものを感じる場合がしばしばある。

だから、現代の中国大陸には、三国志時代の治乱興亡ちらんこうぼうがそのままあるし、作中の人物も、文化や姿こそ変っているが、なお、今日にも生きているといっても過言でない。

ところが、現在の「序」では削られたのは、

従軍二回、北支中支の黄土を踏んでから、私は、少年時代にも耽讀した三國志演義を、もういつぺん讀み返してみた。そして、再讀して得た大きな意義と新しい興味を覺えて、遽にこの執筆を思ひついた。

というところと、文の最後に、

多少なり興亞の大業の途にある現下の讀物として、役だつ所があれば望外の倖せである。

という二箇所が削られたのがとても目立っている。このことから、「三国志すきだった」がため、三国志そのものを取り組むだけではなく、日中戦争と中国に対する関心の高揚の結果として、吉川『三国志』の執筆の念を固めたことと、日中戦争を背景にした吉川『三国志』の出版意図という二点が押さえられる。

2.1.2.3. 吉川英治の戦争思想

昭和 10 年（1935）に吉川氏が『草思堂随筆』の中に「真ン中」の思想を提出した。

私は、左翼でもない、右翼でもない。といって、改めて、ファッショだという、宣言する必要も持たない。

私は、由来、私だ。

×

思想的に、ずいぶん、動揺をもった、現代の日本人には、およそ、同感な人が多かろうと思う。

左でもない、右にも、うなずけない。強いていえば、真ン中だ。

真ン中は、日本思想の、余白である。そして、この余白が、いちばん、ひろい。

私は、思う。——将来の、思想、文学、すべての芽が、ここにもりあがって来なければ、嘘だと。[44]

氏の「真ン中」の思想は、氏を研究するときに、いつも持ち出される問題であるが、しかし、彼の真ん中には、実際には落とし穴が開いているのではないかと疑問を抱いた学者もいた[45]。

竹内好も批判しているように、「菊池寛、大佛次郎というブルジョア作家は消極的に批判しつつ、結局屈伏して行ったけれども、吉川英治は積極的にファシズムに加担した」という。昭和 12 年（1937）12 月に吉川氏が書いた「南京陥落に寄る」という一文の中で以下のように述べた。

同時に支那の民衆に知らしめたい。抗日支那の態形の崩潰に、徒らに感

[44] 吉川英治「ゴシップ」『草思堂随筆』東京：新英社、1935 年

[45] 新保祐司・冨岡幸一郎「対談吉川英治と大佛次郎—歴史小説家と歴史家—」『国文学：解釈と鑑賞』66：10、東京：至文堂、2001 年、27

傷になるなかれと。それは支那そのものではない、僞瞞僞裝せる一政權と、前科者の植民國との野合が作つた偉大なるトリツクでしかなかつたのだ。支那の民衆は、一日もはやく、抗日職業者と戰禍をふりすてて、樂土の建設に、東洋の盟主の力を求むべきである。その賢明は、やがて支那國民の、最も正しい面子（メンツ）とならう。[46]

この南京陥落の後に書かれた文の中で、氏は中国に「東洋の盟主」の日本に抵抗するのをやめようと中国人に声かけた。つまり、昭和 13 年（1938）に東亜新秩序―〈帝国指導の下に日満支三国の提携共助〉の実現が斎藤実内閣によつて決定されたことを背景とし、南京陥落の際に氏にはすでに日本を盟主としたアジアの新秩序という理想があった。また、氏が中国に渡航した後の昭和 12 年（1937）9 月も、「この自然の民を良牧する者は、日本以外にはあり得ぬものであるといふ、大きな東亜の宿命を、再び確信したことであった」[47]と述べ、日本は東亜盟主であるべきという観念を変えなかった。

「大衆」の抑圧感覚に照応する吉川の内部にあった抑圧感覚を吸い上げることによって推進された日本ファシズムに、吉川英治はごく自然に加担し得たし、ある部分ファシズムを領導し得たのである。

と丸山浩（2005）[48]が述べているように、「事変後、毎朝部屋にこもって新聞を読み耽っていた」[49]という当時の一般大衆と同様に戦争熱の最中にあった吉川氏の姿は想像しがたくない。

---

[46] 吉川英治「南京陥落に寄る」『窓辺雑草』東京：育生社、1938 年、93
[47] 吉川英治「黄河の水――支那なるものの民族性――」『窓辺雑草』東京：育生社、1938 年、131
[48] 丸山浩「吉川英治と小林秀雄 ：「読者」「大衆」をめぐって」山陽女子短期大学研究紀要 27, 2005 年
[49] 丸山浩「吉川英治と小林秀雄 ：「読者」「大衆」をめぐって」山陽女子短期大学研究紀要 27, 2005 年

2.1.2.4. 吉川英治の中国体験と『三国志』創作

実際、吉川英治が中国体験を通じて感じたものをどのように吉川『三国志』の中に持ち込まれたかについて、考えてみよう。

はじめての渡航に関して、松本昭（1987）は以下のように述べた。

> 英治がそこ（北京の南口鎮）で見たものは、激しい抗日戦線の姿だった。しかも戦場と化したこの地にあって、常に変わらぬ表情で暮らしている中国人の姿――。悠久の天地と共にあるその強さに、「いわば日本的感覚で、事態を解決するのは誤っており、中国人の多角的で複雑な性格――、この天地と共にあった民族が長い興亡の歴史を通してもつに到った性格を、理解せねばならぬ」と、しみじみ思ったというのだ。[50]

このように、戦火の下に頑張って生きようとする中国民族にたいする感心は、吉川『三国志』にもところどころ書かれ、三国時代の難民描写の底調になる。

> 戦乱があれば、戦乱のない地方へ、洪水や飢饉があれば、災害のなかった地方へ――大陸の広さにまかせて、大陸の民は、流離漂泊（りゅうりひょうはく）（「諸葛氏一家」「孔明の巻」）

または、

> 旅は苦しい。つらい。

[50] 松本昭「戦う日々」『人間　吉川英治』東京：六興出版、1987 年

いやしばしば生命の危険すらあった。また大自然の暴威——大陸の砂塵や豪雨や炎熱にも虐しいたげられ、野獣、毒虫の恐怖にも襲われた。

二十歳だいの長男。まだ十三、四歳の孔明。その下の弟妹たちは、このあいだにこそ、たしかに大きな「生きぬく力」を学んだにちがいない。

それは、流離の土民の子も、同じように通ってきた錬成の道場だったが、出す素質がなければ艱難はただ意味なき艱難でしかない。——幸いにも、諸葛家の子たちには、天与の艱難を後に生かす質があった。(「諸葛氏一家」「孔明の巻」)

というように、作中の人物の背景にもこっそりと編みこまれた。

また、吉川氏の「北京」[51]という文章の中にも、東洋と世界、中国と日本の間に住んでいる民への観察が見られる。同文でも、

東洋といふ文化的なにほひは、この大きな景観に接してから、日本人には特に強く、そして、東洋を感じ直す眼が一変してくる。

城内の諸門や天壇の塔や箭楼などが、茜いろの夕靄の海から浮び上つてゐる。それを抱く内城の線の長さはまるで眼も届かないは果に淡れてゐる。古代エジプトのお伽噺のやうな文化が、いやそれ以上の現實が、こゝにはある。——今まで車窓から目撃してきた。黄いろい土と黄いろい水と、そして高粱と泥の家としかない大陸の上に、どうしこの文明があつたろうか。

[51] 吉川英治「北京」『支那紀行』東京：第一書房、1940 年、45-55

というように、中国の大河・大地、そしてそれで生まれた文化・歴史に惹かれた吉川氏の姿勢が伺える。無論そこで見たもの——「華麗な街の楼門(ろうもん)や、黄瑠璃(きるり)の瓦の宮殿、大理石の橋」や、「両側の楊柳(やうりう)」や、「地酒を賣る茶館(サーカン)」、そこで感じたもの——「星を仰ぐと、ことし初めての、秋が肌にひそひそ沁(し)み入つてくる」などが彼の作り上げた『三国志』の世界の景物となったに違いない。[52]

2.1.2.5. 吉川英治の戦争思想と『三国志』創作

なお、吉川氏は『三国志』を通じて天意と王覇の思想を語った。王道とは、儒道を理想とした政治思想で、有徳の君主が仁徳をもって國を治める政道をさし、その反対として、武力・権謀を用いて国を治める政道としての覇道が存在する。

そして、天意とは、天の意志や、自然の摂理というものであり、吉川氏の天意観念に関して、松本昭（1987）は以下のように述べた。

> この悠久の黄河から、さらにまた悠久のこの民族から、英治は何を学んだのであろうか。そこには、かつての英治の中にはなかった思想が、随所に描かれている。「天の意」ということである。（中略）「天の意」、つまり自然の理という思想は、悠久の中国民族の育んだ生活哲学であった。（中略）この「天の意」という宇宙の真理、自然の摂理に順応して、悠々と生きてゆこうとする。これは一つの運命的人生観かもしれないが、悠久な中

[52] たとえば、「洛陽千万戸、紫瑠璃黄玉の城楼宮門の址も、今は何処い？」（「改元」）のような表現から伺える。

国の天地の産物であった。そして、英治は、治乱興亡の『三国志』の中に、それを見ていた。

「天の意」・「天命」・「天時」・「天の与え」・「天の賜物（たまもの）」など、作品の中には天の摂理と関わっていることばが多く用いられたが、それはもとより『三国志演義』に満ちた思想で、吉川氏独特の発想でもない。蜀は「天意」で滅ぶという思想ももとより『三国志演義』にあった。諸葛亮が提出した総戦略と歴史との矛盾[53]を解決するために存在する観念であるともいえよう。その観念を踏まえ、吉川氏がこう述べた。

魏国の国運というものや、仲達個人の運勢も強かったことは、このときの一事を見ても、何となく卜(ぼく)し得るものがあった。それにひきかえて、蜀の運気はとかく揮(ふる)わず、孔明の神謀も、必殺の作戦も、些細なことからいつも喰いちがって、大概の功は収め得ても、決定的な致命を魏に与え得なかったというのは、何としても、すでに人智人力以外の、何ものかの運行に依るものであるとしか考えられない。（「ネジ」「五丈原の巻」）

このように、『三国志演義』の中に既にあった「天意」の思想を吉川氏がうまく吸収し、この「天意」の趨きで歴史が決まると観念していた。

では、天意は完全に把握できないものなのだろうか。ところがそうでもない。『三国志演義』の中では、「天意」がよく「徳」とセットで物語の中に出る。「李卓吾本」では「天數有變，神器更易，歸於有德之人，此定然之理也」（第九三回「孔明祁山破曹真」）と書いてあるところも、吉川氏もそのまま「天数

[53] 余洪江「試論『三國演義』中的陸遜形象」『三國演義學刊』（二）成都 ： 四川省社會科學院出版、1986 年

は変あり、徳ある人に帰す」と引いた。このように「天意」は「徳ある人」、すなわち「王道」を歩む側に帰すのが物語の基調になっている。

それでは「王道」を始終歩んできたはずの蜀の國はどうして最後に滅ぶかというと、吉川氏が『三国志演義』から一歩進んで解釈していた。

> 蜀軍がついに勝てなかった原因として、劉備以来、蜀軍の戦争目的として唱えてきた「漢室復興」という旗印が、はたして適当であったか、また、中国億民に、いわゆる大義名分として、受け入れられるに足るものであったか、について疑問を示す。
>
> なぜならば、中国の帝室や王室は、王道を理想とするが、歴史の示すように、常に覇道と覇道のせめぎ合いによって、交代が繰り返されているものなので、後漢末には漢室の信望は全く地に堕ちて、民心は完全に漢朝から離れさっていたため、ひとたび漢朝から離れた民心は、いかに呼べと叫べど「覆水ふたたび盆に返らず」の観があった。孔明の理想がついに未完に終わった根本の原因も、蜀の人材難もみなこれに由来するというのである。[54]

「後漢末には漢室の信望は全く地に堕ちて、民心は完全に漢朝から離れさっていた」ため、諸葛亮がどんなに頑張っても仕方がないという氏が提示した新たな史観であった。

また、従来にはなかった「天意」・「王道」に関する新しい観念が吉川『三国志』の中で提示されている。敵軍の惨死を見て悲しむ諸葛亮を描写する場面で、従来の底本になかった趙雲の回答が書かれた。

[54] 雑喉潤『三国志と日本人』東京：講談社、2002 年、152-153

「社稷の為には、多少の功はあろうが、自分は必ず寿命を損ずるであろう。いかにとはいえ、かくまで、殺戮をなしては」

聞く者みな哀れを催したが、ひとり趙雲は、然らずと、かえってそれを孔明の小乗観であると難じた。

「生々流相、命々転相。象をなしては亡び、亡びては象をむすぶ。数万年来変りなき大生命のすがたではありませんか。黄河の水ひとたび溢るれば、何万人の人命は消えますが、蒼落としてまた穂は実り人は増してゆく。黄河の狂水には天意あるのみで人意の徳はありませんが、あなたの大業には王化の使命があるのではありませんか。蛮民百万を亡ぼすも、蛮土千載の徳を植えのこしておかれれば、これしきの殺業何ものでもございますまい」

「ああ。……よく云って下すった」

孔明は趙雲の掌を額にいただいてさらに落涙数行した。(「戦車と地雷」「出師の巻」)

趙雲の話の中では、「天意」・「人意の徳」・「王化」という三つの言葉が一緒に並べられた。そして、一部の人の戦死を悲しむ諸葛亮の観念が、「小乗」と見なされた。「小乗」とは、自己の解脱だけを目的とする教えのことで、すべての人間の平等な救済と成仏を説く「大乗」側からの貶称である。趙雲の話を聞き、諸葛亮が突然悟ったこの描写は氏の思想を伺える一側面として極めて重要な場面だと思う。

なぜならば、この叙述は、吉川氏がその序文の中で言及した「興亜」・そして氏が日本を東亜の盟主とした氏が持っているアジア主義の観念を想起させるのではないか。「王道」のためであれば、一部の殺戮は許されるという戦時

中において書かれる文章であるから、趙雲のこの話の背後にある真意も疑わしくなってきた。やはり氏が意識的にか、無意識的にか、彼当時の戦争に対する思想を『三国志』に埋め込んだのではないか。

2.2. 吉川英治『三国志』の人物像

この部分では、魏・蜀・呉から代表的な主君と軍師を一人ずつ選び、その描写方法を分析する。方法として、各人物を主に三つの部分から分析していきたいと思う。

一、具体的に特定人物はいかに作り上げられてきたかについて、特定人物が多く描写される重要場面をいくつか選び、「李卓吾本」と『通俗三国志』と吉川『三国志』における同場面の比較を通じて分析してみたいと思う。

二、重要場面の他に、吉川の特定人物に対する加筆傾向を分析する。

三、今まで羅貫中の『三国志演義』の特定人物に対する人物像に対する先行研究を踏まえてから、吉川氏と羅氏が描いた特定人物との差を述べ、その差が出る原因と意義について考える。

2.2.1. 主君たち

2.2.1.1. 曹操

2.2.1.1.1. 曹操の初登場と容貌描写

曹操の登場に関して、「李卓吾本」第一回「劉玄德斬寇立功」では、

> 是夜二更。內外一齊縱火。嵩雋各引兵操鼓。出奔賊寨。火焰張天。賊眾驚慌。馬不及鞍。人不及甲。四散奔走。殺到天明。張梁張寶引敗殘軍士。奪

路而走。見一彪人馬。盡打紅旗。當頭來到。截住去路。為首閃出一個好英雄。身長七尺。細眼長髯。膽量過人。計謀出眾。笑齊桓。晉文無匡扶之才。論趙高。王莽少縱横之策。用兵彷彿孫吳。胸內熟諳韜略。官拜騎都尉。沛國譙郡人也。姓曹。名操。字孟德。乃漢相曹參二十四代孫。

というように書かれ、勇と才のある「英雄」として登場した。そして三ページをわたって曹操の出身を紹介した。この紹介文の中にも「年幼時好飛鷹走犬，喜歌舞吹彈，少機警，有權術，遊蕩無度」というマイナス的な描写があった。

『通俗三国志』（初編巻の二『劉玄徳破黄巾賊』）になると、三ページにわたる紹介文が消されて、最初の登場文だけがそのまま残った。

そして吉川『三国志』になると、この登場文がいきいきと描かれるようになった。

草は燃え、兵舎は焼け、逃げくずれる賊兵の軍衣にも、火がついていないのはなかった。

すると彼方から、一彪（ぴょう）の軍馬が、燃えさかる草の火を蹴って進んできた。見れば、全軍みな紅（くれない）の旗をさし、真っ先に立った一名の英雄も、兜（かぶと）、鎧（よろい）、剣装、馬鞍、すべて火よりも赤い姿をしていた。（「転戦」「桃園の巻」）

それに続き、

いうと、紅の旗、紅の鎧、紅の鞍にまたがっている人物は、玄徳の会釈を、馬上でうけながら微笑をたたえ、「ごていねいな挨拶。それへ参って申さん」と、赤夜叉（あかやしゃ）の如く、すべて赤く鎧よろった旗本七騎につつまれて、

玄徳の間近まで馬をすすめて来た。

近々と、その人物を見れば。

年はまだ若い。肉薄く色白く、細眼長髯、胆量人にこえ、その眸には、智謀知れないものが見えた。

声静かに、名乗っていう。

「われは沛国譙郡（安徽省・亳県）の生れで、曹操字は孟徳、小字は阿瞞、また吉利ともいう者です。すなわち漢の相国曹参より二十四代の後胤にして、大鴻臚曹崇が嫡男なり。洛陽にあっては、官騎かんき都尉といに封ぜられ、今、朝命によって、五千余騎にて馳せ来り、幸いにも、貴軍の火攻めの計に乗じて、逃ぐる賊を討ち、賊徒の首を討つことその数を知らないほどです。――ひとつお互いに両軍声をあわせて、天下の泰平を一日もはやく地上へ呼ぶため、凱歌をあげましょう」（「転戦」「桃園の巻」）

というように書き換えられた。危険な戦場を描写することにより、それを制覇する英雄としての曹操が描かれた。また、馬に跨ることにより、戦場を駆け回る英雄さを表現し、読者の視線も劉備の視線の高度から、曹操を仰ぐ視線になる。なお、「草の火を蹴って」「紅の旗、紅の鎧、紅の鞍にまたがっている」によって、曹操は鮮明な色彩感覚を帯びている。

このような曹操をみて、吉川『三国志』では

玄徳は正直に、彼の人物に尊敬を払った。晋文匡扶の才なきを笑い、趙高王莽の計策なきを嘲って時々、自らの才を誇る風はあるが、兵法は呉子孫子をそらんじ、学識は孔孟の遠き弟子をもって任じ、話せば話すほ

ど、深みもあり広さもある人物と思われた。(「転戦」「桃園の巻」)

または、

「たとえば先頃、野火の戦野で出会って挨拶を交わした――赤備(かぞなえ)の一軍の大将、孟徳曹操(もうとくそうそう)などという人物は、まだ若いが、人品(じんぴん)といい、言語態度といい、まことに見あげたものだった。叡智の才を、洛陽の文化と、武勇とに磨いて、一個の人格に飽和させているところ、彼など真に官軍の将軍といって恥かしからぬ者であろう。ああいう武将というものは、やはり郷軍や地方の草莽(そうもう)のなかには見当らないと思うな」と、賞ほめたたえた。(「檻車」「桃園の巻」)

と劉備も彼を尊敬しているように仕立てられた。

また、底本になかった曹操の容貌の描写が施された。

白皙秀眉(はくせきしゅうび)、丹唇(たんしん)をむすんで、唯々(いい)として何進の警固についてはいる…(「舞刀飛首」「桃園の巻」)

他の人物と比べて、吉川氏が曹操の外見描写に力を注いでいるように見える。[55]

「白面郎「曹操」」では曹操の生い立ちを改めて紹介したが、

[55] 「少年の頃になると、色は白く、髪は漆黒で、丹唇明眸、中肉の美少年ではあり、しかも学舎の教師も、里人も、「恐いようなお児だ」と、その鬼才に怖れた(「白面郎『曹操』」)」というように、少年時代の曹操も美少年として吉川氏に描かれた。

しかし、人の憎みも多いかわり、一面任侠の風(ふう)もあるので、

「気の利(き)いた人だ」

とか、また、

「曹操は話せるよ。いざという時は頼みになるからね」

と、彼を取り巻く一種の人気といったようなものもあった。(「白面郎『曹操』」「桃園の巻」)

ここでは曹操を人望のある青年として描いた。これは前述した『通俗三国志』では消せられた部分と重なっている部分であり、「任侠の風」という言葉から考えてみれば、「少機警。有權術。而任俠放蕩。不治行業」と書かれている『魏志』をも参考にしたかもしれない。

2.2.1.1.2. 曹操の死の描写

曹操の死ぬ寸前、彼は重臣を病蓐の前に呼び集め、長男の曹丕を立てようと託した後、世を去った。その続きとして、「李卓吾本」第 76 回「魏太子曹丕秉政」では曹操に対する七つの評論を集めた。その中で曹操を賞賛したものを挙げてみれば、

後史官有詩曰。

雄哉魏太祖。天下掃狼煙。動靜皆存智。高低善用賢。長軀百萬眾。親註十三篇。豪傑同時起。誰人敢贈鞭。

というように、人材を用いたことと、智謀をめぐらしたことが高く評価された。または、

宋賢贊曹操功德詩曰。

漢末挺生曹孟德。胸蟠星鬥氣凌雲。智謀超越數員將。才德惟慳萬乘君。

雖秉權衡欺弱主。尚存禮義效周文。當時若使無公在。未必山河幾處分。

というように、帝を苦しめたことを否定的に捉えたが、曹操は礼法道義を完全に捨てたわけではないと評した。曹操を否定した評論として、

前賢又貶曹操詩曰。

殺人虛墮淚。對客強追歡。遇酒時時飲。兵書夜夜觀。秉圭陞玉輦。帶劍上金鑾。歷數奸雄者。誰如曹阿瞞。

というように、曹操を道義面から責めた。異なる人が書いたこの七つの評論の中で、四つは賛美、二つは批評、一つは中立的に見える。

『通俗三国志』では、李卓吾本からこれらの評論を引き継がず、曹操の死ぬ場面しか描かなかった。また、その叙述はほとんど李卓吾本と変わらなかったのである。

吉川『三国志』の曹操の死ぬ場面は以下のように描写された。

おごそかに、こういうと、曹操はその瞬間に六十六年の生涯を一望に回顧したのであろう、涙雨のごとく頬をぬらし、一族群臣の嗚咽(おえつ)する眸の中に、忽然(こつぜん)と最期の息を終った。――時、建安二十五年の春正月の下旬、洛陽の城下には石のような雹(ひょう)が降っていた。(「曹操死す」「出師の巻」)

曹操の死は天下の春を一時寂闇(せきあん)にした。ひとり魏一国だけでなく、蜀、

呉の人々の胸へも云わず語らず、人間は遂に誰であろうとまぬがれ難い天命の下にあることを、今さらのように深く内省させた。（「武祖」「出師の巻」）

いかにも希に世に誕生した偉人が世を去ったように描写された。また、曹操に対する評論も『通俗三国志』同様に引いていなかったが、作中人物の口を借りて、曹操の死を惜しんだ。

「故人となって見れば彼の偉大さがなお分る」

「彼の如き人物はやはり百年に一度も出まい、千年に一人もどうだか」

「短所も多かったが、長所も多い。もし曹操が現れなかったら、歴史はこうなって来なかったろう。何しても有史以来の風雲児だった。華やかなる奸雄（かんゆう）だった。彼逝（ゆ）いて寂寥（せきりょう）なき能（あた）わずじゃ」

ここしばらくの間というもの、洛陽の市人は、寄るとさわると、操の死を悼（いた）み、操の逸話を語り、操の人物を評し、何かにつけて、その生前を偲（しの）び合っていた。（「武祖」「出師の巻」）

とはいえ、これはあくまでも吉川氏自身の感嘆であり、吉川氏の曹操に対する愛着が強く反映されていると思う。

2.2.1.1.3. 曹操像に対する加筆

1959 年、中国の学界では、曹操をいかに評価すべきかについて、激しい論争が行われた。中国学者の郭沫若（1959）が小説『三国志演義』の偏見を排除した上に歴史の側面から曹操を見直すという意見を提出したのが論争の始ま

りであった。そのとき、劉知漸（1959）は曹操像で実現した悪役の典型という『三国志演義』の達成を肯定し、以下のように述べた。

もし誰かが三国歴史小説を書き直そうとしたら、曹操を評価しなおすべきである。彼の私利私欲と人民に血の債務を指摘しながら、彼の政治才能・軍事才能と文学才能をも指摘しべきである。（翻訳は筆者）[56]

劉氏が知らないのは、この再評価は『三国志演義』の受容国である日本ですでになされた。吉川氏の曹操に対する加筆を整理してみれば、吉川氏は曹操の優れた政治力と軍事力を称え、また、詩情豊かな人として曹操を捉えている。

また、吉川氏は以下のように曹操の戦いを曹操の詩にたとえた。

古今の武将のうち、戦をして、彼ほど快絶な勝ち方をする大将も少ないが、また彼ほど痛烈な敗北をよく喫している大将もすくない。

曹操の戦は、要するに、曹操の詩であった。詩を作ると同じように彼は作戦に熱中する。

その情熱も、その構想も、たとえば金玉の辞句をもって、胸奥の心血を奏（かな）でようとする詩人の気持ちと、ほとんど相似たものが、戦にそのまま駆りたてられているのが、曹操の戦ぶりである。

だから、曹操の戦は、曹操の創作である。――非常な傑作があるかと思えば、甚だしい失敗作も出る。（「梅酸・夏の陣」「草莽の巻」）

あるいは、政治面に関して吉川氏は以下のように政治に理想を託した曹操を描

[56] 劉知漸「羅貫中為什麽要反對曹操――與郭老商榷」1959 年、『『三國演義』新論』に収録、重慶：重慶出版社、1985 年
原文:如果有人要重寫一部三國歷史小説的話，應該給曹操以重新評價，既要指出他的自私自利，指出他在人民身上所欠的血債，也要指出他的政治才能和軍事才能以及文學才能。

写した。

曹操は政治にたいしても、人いちばいの情熱をもって当った。許都を中心とする新文化はいちじるしく勃興(ぼっこう)している。自己の指導ひとつで、庶民生活の様態があらたまってきたり、産業、農事の改革から、目にみえて、一般の福利が増進されてきたりするのを見ると、

「政治こそ、人間の仕事のうちで、最高な理想を行いうる大事業だ」

と信じて、年とるほど、政治に抱く興味と情熱はふかくなっていた。(「大歩す臣道」「臣道の巻」)

以上のように、情熱を持ってその雄才を生かしていくという新たな曹操が描かれた。実際、「情熱」という言葉は、吉川『三国志』では十二回使われた。その中の五回は曹操を形容するために用いられた。吉川氏にとって、曹操はまさに「情熱」の化身ともいえよう。この「情熱」な曹操像は、『三国志演義』を引き継ぎ、吉川『三国志』でもよく「ははははは」と笑っている曹操のイメージにふさわしいであろう。

しかも、吉川氏の曹操に対する賛美は才能に留まらず、

果断即決は、実に曹操の持っている天性の特質中でも、大きな長所の一つだった。彼には兵家の将として絶対に必要な「勘(かん)(かん)」のするどさがあった。他人には容易に帰結の計りがつかない冒険も、彼の鋭敏な「勘」は一瞬にその目的が成るか成らないか、最終の結果をさとるに早いものであった。(「溯巻く黄河」「孔明の巻」)

というように彼の性格にも及ぼした。または、遭難しても、その逆境を転じる精神が何回でも吉川『三国志』で描かれている。総じて言えば、吉川氏が作り上げたのは、英雄のキャラクターを持っている曹操像であった。

しかし、曹操の性格の変化も多く加筆された。それは以下のように何段階に分けて描かれたものになっている。

> けれど、どんな人物でも、大きな組織のうえに君臨していわゆる王者の心理となると、立志時代の克己や反省も薄らいでくるものとみえる。(「許都と荊州」「赤壁の巻」)

または、

> 彼の意(こころ)はいよいよ驕(おご)り、彼の臣下は益々慢じ、いまや、曹操一門でなければ人でないような、我が世の春を、謳歌していた。(「蜀人・張松」「望蜀の巻」)

あるいは、

> 彼もいつか、むかしは侮蔑(ぶべつ)し、唾棄(だき)し、またその愚を笑った上官の地位になっていた。しかも、今の彼たるや人臣の栄爵を極め、その最高にある身だけに、その巧言令色(こうげんれいしょく)にたいする歓びも受けいれかたも、とうてい、宮門警手の一上官などの比ではない。(「日輪」「図南の巻」)

物語の推進に連れて、曹操に対する悪評がどんどん増えてきた。特に、忠臣

を殺す行為が多く描かれた晩年の曹操にたいして、吉川氏は代弁しなかった。しかし、曹操の晩年に対する悪評もその若い頃を偲ぶような形で描かれた。そして、物語の中心が自然と諸葛亮に代わっていた。物語を順調に運ぶために底本ではかつてなかった曹操絶賛の解消案でもあろう。

2.2.1.1.4. 曹操像が持つ意義

「子治世之能臣。亂世之奸雄也。」[57]というのが汝南許劭が曹操に対する評価である。この「奸雄」は曹操の性格を一概した言葉ともいえよう。許建中（1986）は曹操の奸悪と雄才を曹操の「二重組合性格」といい、

> 曹操の「二重組合性格」がもつ永久の価値は、人間社会生活の中にある功利関係と道義関係との矛盾衝突と、羅貫中がこの問題に対する深刻な再認識と認知を体現するところにある。異なる時代の人々はこのような矛盾衝突に対して異なる解釈をもつ。昔の認識は道義関係に傾いたが、今後は変わるかもしれない。人間社会の中にこの矛盾衝突が徹底的に解決しない限り、曹操の「二重組合性格」には永久の存在価値と客観的な存在基礎がある。（翻訳は筆者）[58]

と論じた。この「二重組合」を持つことで、曹操は『三国志演義』の中で異彩を放っている。従来は、道義関係が功利関係より重視されることで、曹操は悪役として扱われてきたが、両面性を持っていることに魅力を感じた吉川氏の翻

[57] 李卓吾［評］「劉玄德斬寇立功」『李卓吾先生批評三國志』臺北：天一出版、第 1 回、11
[58] 許建中「試論曹操的性格的二重組合――讀《三國志通俗演義》斷想之一」『三國演義學刊（二）』四川：四川省社會科學院出版社、1986 年、145
原文：曹操二重組合性格所具的永恆價值，在於它體現了人類社會生活中功利關係與道義關係兩者之間的矛盾衝突，反映羅貫中對這個問題深刻的反思和認知。不同時代的人們對此矛盾衝突的解釋是不相同的，以前的認識偏傾於道義關係，今後或許有所改變。只要人類社會中這一矛盾衝突未得到徹底的真正的解決，曹操二重組合性格就有永恆的存在價值和客觀的存在基礎。

案で新たな曹操像が誕生した。このような新たな曹操像に対して、邱岭、呉芳齢（2006）は以下のように述べた。

吉川英治は忠義と奸悪の価値観を根本から否定し、人に対する忠義と奸悪の評価標準を完全に捨てた。曹操を政治的、社会的な言語環境の中に置けて判断しないかわりに、社会という人間生活共同体から離し、彼を個人的な言語環境の中に置いて取り扱っている。彼を大衆をリードする英雄として賞賛しないと同時に、賢人・善人を殺害し、乱を企て・国を逆らう奸雄として彼を責めず、ただ彼を人類の中の一つとして理解している。[59]

曹操の奸悪と主君に対する反動が儒家の倫理規範の下から解放されれば、曹操像も悪役から解放されるのであるが、吉川氏は決して忠と奸の価値観を否定したわけではない。吉川氏自身も、

痴(ち)や、愚や、狂に近い性格的欠点をも多分に持っている英雄として、人間的なおもしろさは、遥かに、孔明以上なものがある曹操も、後世久しく人の敬仰(けいぎょう)をうくることにおいては、到底、孔明に及ばない。

千余年の久しい時の流れは、必然、現実上の両者の勝敗ばかりでなく、その永久的生命の価値をもあきらかに、曹操の名を遥かに、孔明の下に置いてしまった。

時代の判定以上な判定はこの地上においてはない。（「諸葛菜」「篇外余録」）

[59] 邱岭、呉芳齢『三國演義在日本』銀川：寧夏人民出版社、2006 年、188
原文：吉川英治是根本否定了忠奸價值觀，完全拋棄了對人的忠奸評價標準，不置之於政治的、社會的話語環境中衡量，而將之拉離社會這一人類生活共同體，置之於個人的話語環境中來看待，既不將之作為引領大眾的英雄來頌揚，也不將之作為殘賢害善、謀亂逆國的奸雄來鞭笞。而只將之作為芸芸眾生中的一個分子來理解。

と述べていた。吉川氏が最初に曹操の描写に力を入れているのは、曹操が英雄らしい長所と短所の両面を持っている点であろう。しかし、覇道を歩む曹操には永久的な生命価値を持っていない。そこで永久的な生命価値を持っている諸葛亮が登場すると、主役を譲らなくてはならないのである。その点も、諸葛亮が登場してから、権力を握った曹操の欠点を描き始めた吉川氏の執筆態度に直接に繋がっているのではないか。

2.2.1.2. 劉備

2.2.1.2.1. 劉備の初登場と容貌描写

劉備の登場に関して、「李卓吾本」では以下のように書いている。

> 時榜文到涿縣張掛去。涿縣樓桑村引出一個英雄。那人不甚樂讀書。喜犬馬，愛音樂。美衣服。少言語。禮下於人。喜怒不形於色。好交遊天下豪傑。素有大志。生得身長七尺五寸。兩耳垂肩。雙手過膝。目能自顧其耳。面如冠玉。唇若塗朱。中山靖王劉勝之後。漢景帝閣下玄孫。姓劉名備。字玄德。

そして、吉川『三国志』になると、この登場文は以下のよう書き換えられた。

> 後漢(ごかん)の建寧(けんねい)元年のころ。
>
> 今から約千七百八十年ほど前のことである。
>
> 一人の旅人があった。
>
> 腰に、一剣を佩はいているほか、身なりはいたって見すぼらしいが、眉(まゆ)

は秀で、唇は紅く、とりわけ聡明そうな眸や、豊かな頬をしていて、つねにどこかに微笑をふくみ、総じて賤しげな容子ようすがなかった。

年の頃は二十四、五。

草むらの中に、ぽつねんと坐って、膝をかかえこんでいた。

悠久と水は行く――

微風は爽やかに鬢をなでる。(「黄巾賊」「桃園の巻」)

これは物語の冒頭文であり、劉備の初登場でもある。水辺の草むらに静かに座り込む劉備は、「桃園の巻」の半分過ぎてから草の火を蹴って登場した曹操と対照的であった。

劉備の外見に関して、ほかに以下の描写が見られる。

「(前略) まだ若いみすぼらしい風態の男だが、どこか凛然 (りんぜん) としているから、油断のならない人間かも知れないといっていたが」(「白芙蓉」「桃園の巻」)

大将玄徳に会ってみるとまだ年も二十歳台の青年であるが、寡言沈厚のうちに、どこか大器の風さえうかがえるので、太守劉焉は、大いに好遇に努めた。(「転戦」「桃園の巻」)

一彪の軍馬の中に登場した曹操と比べて、庶民の一人としてそのみすぼらしさが強調された。

2.2.1.2.2. 劉備の死の描写

「李卓吾本」第八五回「白帝城託孤」では劉備がある夢を見て、自分がもうすぐこの世から去るのを予言した。

是夜叱退左右。獨臥於龍榻之上。忽然陰風颼颼而起。將燭吹搖。滅而復明。只見燈影之下。二人侍立。先主怒曰。朕心緒不寧。教汝等且退。何意又來故惱朕耶。叱之不退。先主自攜玉塵斧。起而觀之。上首乃云長。下首乃益德也。先主大驚曰。二弟原來尚在。雲長曰。臣非陽人。乃陰鬼也。蓋謂平生不失信義。上帝皆勑命為神。哥哥將與兄弟聚會也。先主扯定大哭。忽然驚覺。二弟不見。即喚從人觀之。時正三更。先主嘆曰。朕不久于塵世矣。

この現在から見て、不合理に見える章段は、元に『通俗三国志』六編巻之三「白帝城蜀帝託孤」でもそのまま引き継がれたが、吉川『三国志』では劉備が夢を見たと書き換えられた。

この年四月頃から蜀帝玄徳は永安宮の客地に病んで、病状日々に篤(あつ)かった。

「いまは何刻(なんどき)か？」

枕前の燭(しょく)を剪(き)っていた寝ずの宿直(とのい)や典医が、

「お目ざめでいられますか。いまは三更でございます」と、奏した。

白々と耀(かがや)き出した燭を見つめながら病床の玄徳は独り言に、

「では、夢だったか……」と、つぶやいた。

そして夜の明くるまで、亡き関羽や張飛の思い出ばなしを侍臣に語った。

このような今から見ると不合理に見える物語を夢の形で合理化する吉川氏の手段は曹操が死ぬ直前の場面（「曹操死す」「出師の巻」）にも見られる。曹操が三更に自分が以前に殺した、伏皇后や、董貴妃や、国舅董承などの一族を目の前にした場面は、吉川『三国志』では「彼は昼夜となく、悪夢にうなされた」といい、そしてその度に伏皇后らを見たと解釈された。

また、「李卓吾本」での劉備が諸葛亮・諸臣・皇子に遺言を告げた部分は、『通俗三国志』・吉川『三国志』にそのまま受け継がれて、吉川『三国志』では劉備の最後を以下のように描いた。

「ああこれで安心した」

と玄徳はふかい呼吸を一つして、傍らの趙雲子龍（ちょううんしりゅう）をかえりみ、

「御身とも、百戦万難の中を久しく共歓共苦してきたが、ついにきょうがお別れとなった。晩節を香（かん）ばしゅうせよ。また丞相とともに、あとの幼き者たちをたのむぞ」

と、一言し、また李厳にも、同じ言をくりかえし、そのほかの文武百官にたいしては、

「すでに命（めい）のせまるを覚ゆ。一々汝らに言を付嘱（ふしょく）するを得ない。それみな一致して社稷（しゃしょく）を扶け、おのおの保愛せよ」

云い終ると、忽然、崩じた。とき寿齢六十三歳。蜀の章武三年、四月二十四日であった。

永安宮中、なげきかなしむ声のうちに、孔明はやがてその霊柩（れいきゅう）を奉じて、成都へかえった。

元来、「李卓吾本」には劉備の生涯に対する九つの賛美が載せられていた。これと対照的に見えるのは、前述した「李卓吾本」に収録されている曹操の生涯に対する二つの批評である。羅貫中は彼自身の愛好を劉備に対する賛に託しているように見える。また、この九つの賛美は『通俗三国志』には引き継がれていなかったため、吉川『三国志』にも書かれていない。なお、「李卓吾本」と『通俗三国志』の両方とも、劉備の遺詔が載せられていたが、吉川『三国志』には引き継がれていなかった。物語が改編に連れて段々簡約化されている傾向は当然存在するが、劉備の死に関して加筆しなかった点も、吉川氏が劉備描写にそれほど力を入れていないようにも見える。

2.2.1.2.3. 劉備像に対する加筆

吉川『三国志』における劉備の血統がより強調され、それは王の血統を重視する日本読者に受け入れやすくするための手段であろう。その表現として、劉備の母が劉備に以下のように語った。

「……お忘れかえ、阿備。おまえのお父様も、お祖父(じい)様も、おまえのように沓(くつ)を作り蓆(むしろ)を織り、土民の中に埋もれたままお果てなされてはいるけれど、もっともっと先のご先祖をたずねれば、漢の中山靖王劉勝(ちゅうざんせいおうりゅうしょう)の正しい血すじなのですよ。おまえはまぎれもなく景帝(けいてい)の玄孫(げんそん)なのです。この支那をひとたびは統一した帝王の血がおまえの体にながれているのです。あの剣は、その印綬(いんじゅ)というてもよい物です」(「桑の家」「桃園の巻」)

この血統と国を救う使命は劉備の母の口によって何度も強調された。この血

統を強調しなければ、蜀の正統性がなくなってしまう。また、劉備から吉川氏の筆の下で活躍している曹操に読者は傾いてしまう可能性もあるだろう。それで蒼白なる劉備のイメージを強めなければならない。しかし、多方面にわたって曹操を賛美した吉川氏の筆力は、劉備の造形においては弱く感じられる。氏の劉備造形は、やはり『三国志演義』と同じく、「仁徳」・「人材を求める」[60]・「微温的な性格」という三点にとどまっている。

仁徳に関して、吉川氏は、

「玄徳にはなんの野心もありません。ひたすら朝廷をうやまい、丞相にも服しております。のみならず土地の民望は篤く、よく将士を用い、敵のわれわれに対してすら徳を垂れることを忘れません。まことに人傑というべきで、ああいう器(うつわ)を好んで敵へ追いやるというのも甚だ策を得たものではあるまいと存じまして」(「奇舌学人」「臣道の巻」)

「自分を慕うこと、あたかも子が親を慕うようなあの領民を、なんで捨てて行かれようぞ。国は人をもって本(もと)とすという。いま玄徳は国を亡(うしな)ったが、その本はなお我にありといえる。――民と共に死ぬなら死ぬばかりである」と云ってきかなかった。

このことばを孔明から伝え聞いて、将士も涙を流し、領民もみな哭(な)いた。(「亡流」「赤壁の巻」)

---

[60] 例として以下の章段が挙げられる。
求めてやまなかったものは「物」でなく、「人物」であった。司馬徽に会ってからは、なおさら、その念を強うし、明けても暮れても、人材を求めていたことは、その日の彼の歓び方をもっても察することができる。
そうした玄徳であるから、
(この人物こそ)と見込むと、実に思いきった登用をした。(「吟嘯浪士」「孔明の巻」)

というもとより『三国志演義』にある描写に従い、劉備の仁徳を描いてきた。さらに、

拝されても、嘲弄されても、玄徳はいずれにせよ、気にかけなかった。自分が畑に働いていた頃の気持をもって、土民の気持を理解しているからだった。（「檻車」「桃園の巻」）

というように、民の気持ちを分かるのを、彼の生涯から原因を求めた。庶民の中から出てきた貴族ともいえよう。

性格については、情熱的な曹操とは異なり、劉備は以下のように微温的に描かれた。

玄徳はもとより、そう腹も立っていない。こらえるとか、堪忍とか、二人はいっているが、彼自身は、生来の性質が微温的にできているのか、実際、朱雋の命令にしてもそう無礼とも無理とも思えないし、怒るほどに、気色を害されてもいなかったのである。（「檻車」「桃園の巻」）

元来、玄徳は、よほどなことがあっても、そう欣舞雀躍（きんぶじゃくやく）はしない性である。時によると、うれしいのかうれしくないのか、侍側の者でも、張合いを失うほどすこぶるぼうとしていることなどある。（「殺地の客」「赤壁の巻」）

しかし、こういう微温的な性格は、読者に強力な印象を与えた行動や事件を起こせなかったので、劉備の人物像はやはり薄く感じる。

2.2.1.2.4. 劉備像が持つ意義

もとより、『三国志演義』では「愛劉憎曹」の傾向が鮮明になっている。それは、「統治階級の封建的正統思想の体現ではなく、封建時代民衆の審美観念の体現」[61]と言われている。

このような審美観が人物の造形を制約し、『三国志演義』では劉備の歴史における「梟雄」の一面が消せられ、仁義の主・賢君のイメージだけが残された。その代わりに封建統治者が持っている悪徳を「非常之人、超世之杰」と歴史家に評された曹操に強要した。しかし、この一つも欠点がない仁君のイメージは却って魯迅に「似偽」と評された。吉川氏も、魯迅と同様、この「似偽」の性格を感じ取って、劉備の微温的な性格を用心深い性格として解釈した。例えば、有名な「青梅の宴」の場面では、曹操と劉備の性格がぶつかり合う場面が描かれた。劉備が曹操に「当今の英雄は誰か」という質問を投げかけられた時、容易に答えやしない劉備に対して、吉川氏は以下のように解釈した。

> よく取れば、それは玄徳が人間の本性をふかく観(み)つめ、自己の短所によく慎み、あくまで他人との融和(ゆうわ)に気をつけている温容(おんよう)とも心がけともいえるが、悪く解すれば、容易に他人に肚をのぞかせない二重底、三重底の要心ぶかい性格の人ともいえる。(「雷怯子」「臣道の巻」)

すなわち、微温の性格を持っている劉備を吉川氏は完全に肯定的に取らなかった。吉川氏は劉備の行動を底本と異なる観点から見ることにより、劉備の性

[61] 傅隆基「從『三國演義』看歷史小說實與虛的藝術辯證法」『三國演義學刊』(一)、成都: 四川省社會科學院出版、1985 年、183-184

格にある両面性を発見した。また、主人公である劉備に対する加筆を「桃園の巻」の前半にさんざん行ったが、微温的なイメージを維持したまま劉備を描いてきたから、劉備を鮮明な性格を持つ人物にはしていなかった。

2.2.1.3. 孫権

2.2.1.3.1. 孫権の初登場と容貌描写

孫権の初登場は孫策の死を以て登場した。

乃取印綬。喚弟孫權。近臥榻邊曰。若舉江東之眾。決機于兩陣之間。與天下爭衡。卿不如我。舉賢任能。各盡其心。以保江東。我不如卿。汝宜想父兄剏業之艱難。勿輕易也。權拜受印綬。(中略) 策曰。吾弟勝我十倍。江東必然無事。但內事不決。可問張昭。外事不決。可問周瑜。恨周瑜不在左右。不得囑付話也。喚諸弟曰。吾死之後。汝等可聽於孫權所使。宗族中有生異心者，眾皆斬之。骨肉為逆，不得入祖墳遷葬。(中略) 再語孫權曰。汝若負功臣。吾陰魂於九泉之下。必不相見。(「李卓吾本」第二十九回「孫策怒斬于神仙」)

この描写は、『通俗三国志』においても同様にある。吉川『三国志』では、さらに「舉賢任能。各盡其心。以保江東」という手段を「内治的な手腕、保守的な政治の才能」として理解した。

孫権の外見について、「李卓吾本」では、

權生得方頤大口，碧眼紫髯。昔日漢使劉琬入吳。見孫家昆仲曰。吾徧觀孫氏兄弟。雖各才氣秀達。然皆祿祚不終。惟孫仲謀形貌奇偉。骨體非常。

有大貴之表，而又享高壽。眾皆不及也。(「李卓吾本」第二十九回「孫策怒斬于神仙」)

と書いて、『通俗三国志』もこのまま継いだ。吉川『三国志』もこの外見描写を受け継いだが、吉川氏自身の解釈が施された。

孫権、字(あざな)は仲謀(ちゅうぼう)、生れつき口が大きく、頤(あご)ひろく、碧眼紫髯(へきがんしぜん)であったというから、孫家の血には、多分に熱帯地の濃い南方人の血液がはいっていたかもしれない。(「孫権立つ」「孔明の巻」)

ここでの「紫髯」は、「今の紫色（パープル）ではなく、いわゆる『赤ヒゲ』のこと」であり、また「碧眼紫髯」は、「トルコ系異民族の風貌」であることが指摘されている[62]。「紫髯」は『呉志』にある孫権についての描写であるが、「碧眼」はどの歴史書に記載されていない。また、「碧眼紫髯」はいいイメージか、悪いイメージかと言うと、判断し難い。

また、孔明が初めて孫権を見たとき、孫権の外見から彼の性格を推測していた。すなわち以下の章段である。

請孔明坐。謙讓數次。遂坐於側。乃致玄德之意。偷目觀看孫權。碧眼紫鬚，堂堂一表人才。暗思。此人只可激。不可說。且等他問時，便動激言，此事濟矣。」(「李卓吾本」第四十三回 「諸葛亮智激周瑜」)

この描写は『通俗三国志』（三編巻之十「孔明智激孫権」）においても同様であるが、吉川『三国志』では吉川氏がさらに以下のような外観描写を付け加え

[62] 渡辺精一『三国志人物鑑定事典』東京：学習研究社、1998 年、131

た。

孔明の静かなひとみは、時折、孫権の面にそそがれた。

孫権の人相をうかがうに碧瞳紫髯（へきどうしぜん）——いわゆる眼は碧にちかく髯（ひげ）は紫をおびている。漢人本来の容貌や形態でない。

また腰かけていると、その上躯は実に堂々と見えるが、起つと腰から下がはなはだ短い。これも彼の特徴であった。

孔明は、こう観ていた。

（これはたしかに一代の巨人にはちがいない。しかし感情昂（たか）く、内は強情で、精猛なかわりに短所も発し易い。この人を説くには、わざとその激情を励ますのがよいかも知れぬ）（「火中の栗」「赤壁の巻」）

この描写は、『蜀志』の「長上短下」をも参考したのであろう。しかし、総じて言えば、孫権の初登場と外見については、多く加筆されているとは言い難い。

2.2.1.3.2. 孫権像に対する加筆

『三国志演義』の中では、孫権が張遼の挑戦で怒って戦場を駆け、結局敗戦を喫した場面がある。その時、「李卓吾本」第五十三回「孫仲謀大戰合肥」では以下のように描写した。

程普保孫權歸大寨，敗軍陸續回營。孫權因見折了宋謙，放聲大哭。長史張紘諫曰：「主公恃盛壯之氣，忽強暴之勇，三軍之眾，莫不寒心。即使斬將搴旗，威振敵場，此乃偏將之任，非主將之宜也。願抑賁、育之勇，懷王霸

之計。且今日宋謙死於鋒鏑之下，皆主公輕敵之故。今後切宜保重。」權曰：「是孤之過也。從今當改之。」

吉川『三国志』でも、張紘の言葉をこのまま受け継ぎ、以下のように描写した。

長史張紘（ちょうこう）は、よい時と考えて、

「こういう失敗は、良き教訓です。君はいま御年も壮（さかん）なために、ともすれば血気強暴にはやり給い、呉の諸君は、為にみな、しばしば、心を寒うしています。どうか匹夫（ひっぷ）の勇は抑えて、王覇（おうは）の大計にお心を用いて下さい」と、諫めた。（「針鼠」「望蜀の巻」）

この「血気強暴」のイメージは吉川氏が孫権を描写するときに主に用いる言葉になった。たとえば、「李卓吾本」の第六十八回「甘寧百騎劫曹營」に当たる文章が、吉川氏によって加筆され、

曹操は百戦練磨の人。孫権は体験少なく、ややもすれば、血気に陥（おちい）る。

いまや、濡須（じゅしゅ）の流域をさかいとして、魏の四十万、呉の六十万、ひとりも戦わざるなく、全面的な大激戦を現出したが、この、天候が呉に利さなかったといえ、呉は主将孫権の軽忽（けいこつ）なうごきによって、その軸枢（じくすう）をまず見失い、彼自身もまた、まんまと張遼（ちょうりょう）、徐晃（じょこう）の二軍に待たれて、その包囲鉄環のうちに捉（とら）われてしまった。（「休戦」「図南の巻」）

「血気強暴」の故、敗戦した孫権を描いた。そして、この「血気強暴」のイメージをもとに、年をとるに連れて、穏やかになるという『三国志演義』にはなかった新たな孫権像を作り上げた。例えば、孫権がおびただしい土産ものを山と積んで魏に送らせた時、「李卓吾本」の第八十二回「吳臣趙咨説曹丕」では以下のように描写した。

張昭諫曰。貢獻之物。莫非人情。權笑曰。利足以結人心。今貢獻之物。皆瓦石之類耳。何足惜哉。眾官嘆服。

『通俗三国志』六編巻之壱「趙咨入魏説曹丕」もそのまま日本語に翻訳しただけであったが、吉川『三国志』になって、

呉三代の主君に仕えてきた宿老として、とかく幼稚に思われてならなかった孫権がいつのまにかかくの如き大腹中の人となってきたことが、涙のこぼれるほど有難かったに違いない。

並居るほかの臣下も皆、孫権の深慮に嘆服した。

と、わざわざ性格の成熟さを描いた。

この他、母親の言葉に従う子としての孫権以外に、吉川氏の孫権に対する加筆が見えなかったが、「李卓吾本」の第八十二回「吳臣趙咨説曹丕」（『通俗三国志』六編巻之壱「趙咨入魏説曹丕」に当たる部分）では、

咨曰。納魯肅於凡品。是其聰也。拔呂蒙於行陣。是其明也；獲于禁而不害。是其仁也。取荊州兵不血刃。是其智也。據三江虎視于天下。是其雄也。屈身於陛下。是其畧也。以此論之。豈不為聰明仁智雄畧之主也。丕又問曰。

吳王頗知學乎。咨曰。吳王浮江萬艘。帶甲百萬。任賢使能。志存經畧。少有餘閑。博覽經傳歷代史籍。乃豐采奇異之人。不效書生尋章摘句而已。

趙咨が孫権のことを「聰明仁智雄畧之主」として賞賛した。また、趙咨が孫権の学問に対する回答が吉川『三国志』では省略され、以下の句に変え、物語に緊張感を与えた。

曹丕はくわっと眼をこらして彼を見くだしていた。大魏皇帝たる威厳を侵(おか)されたように感じたものとみえる。(「呉の外交」「出師の巻」)

この省略からも、他の人物に比べて吉川氏が孫権に対する無関心が伺える。

2.2.1.3.3. 孫権像が持つ意義

孫権は、底本と同様に、吉川『三国志』「孔明の巻」に、諸葛亮の登場よりやや前に登場したが、また底本と同様に、「諸葛亮が中心となる『演義』の後半部分において、孫権の出番は少なくなり、さしたる役割を果たすこともなく、いつのまにか退場してしまう」[63]という。

『三国志演義』は、蜀と魏の対立と、その間に遊離している呉で構成している。それゆえ、蜀の方を称える『三国志演義』における呉の集団に対する評価も、劉備との連合や闘争により、時には肯定的に、時には否定的に捉えられてきた。しかし、呉を強く描かなければ、三国時代の緊張感も弛んでしまうので、その一番上に立っている孫権も、君主としての強い特徴を持たなければならない。

[63] 伊波律子『三国志演義』東京：岩波書店、1994 年、101

『三国志演義』の中では、孫権が肯定的に描かれ、その実践として、賢人を任用する、穏健な性格の持ち主として描かれている[64]。吉川『三国志』では、孫権が賢人を任用する部分についてあまり加筆しなかった。その穏健的な性格が、「血気強暴」から変化してきたというイメージが強化されたが、他の二人の君主と比べてあまり加筆されていない点から考えてみれば、吉川氏の筆力の冷淡さが伺えるのであろう。周瑜・魯粛を描く（実写）ことで、孫権を描く（虚写）[65]という『三国志演義』の枠から飛び出さなかったともいえよう。

2.2.2. 軍師たち

2.2.2.1. 司馬懿

2.2.2.1.1. 司馬懿の初登場と容貌描写

司馬懿は『三国志演義』の 39 回に登場した。ちょうど三十八回「定三分亮出茅蘆」の諸葛亮が登場した次回にあたる。諸葛亮とともに新たな嵐を巻き上げる風雲児として紹介しようとした羅貫中の意図が見られる。しかし、登場というより、それは簡単な人物紹介に近い。「李卓吾本」第三十九回「孔明遺計救劉琦」では以下のように書いてある。

> 却說曹操罷三公之職。自為丞相。以毛玠爲東曹掾。崔琰爲西曹掾。司馬朗為主簿。朗字伯達，河內溫人也，潁川太守司馬雋之孫，京兆尹司馬防之子。弟兄八人。次子司馬懿，字仲達，操命為文學掾，並掌典選舉之職。

この部分に当たる『通俗三国志』三編巻之七「孔明博望坡焼屯」の中では、

---

[64] 吳錦潤「論孫權形象」『三國演義學刊』（二）、『三國演義學刊（二）』四川：四川省社會科學院出版社、1986 年

[65] 伊波律子『三国志演義』東京：岩波書店、1994 年、101

司馬朗の紹介が省略され、また、吉川『三国志』では、司馬懿を重点にした。

毛玠が東曹掾に任じられ、崔琰が西曹掾に挙げられたのもこの頃である。わけて出色な人事と評されたのは、主簿司馬朗の弟で、河内温の人、司馬懿、字を仲達というものが、文学掾として、登用されたことだった。

その司馬仲達は、もっぱら文教方面や選挙の吏務にあったので文官の中には、異色を認められていたが、軍政方面には、まだ才略の聞えもなかった。（「臨戦第一課」「赤壁の巻」）

「李卓吾本」第六十七回「曹操漢中破張魯」と『通俗三国志』五編巻之三「張遼大戦逍遥津」に司馬懿がまた登場した。この『三国志演義』でいうと、二十八回ぶりの登場について、吉川氏が下線部のように加筆した。

司馬懿仲達は、中軍の主簿を勤め、この漢中攻略のときも、曹操のそばにあって、従軍していた。

戦後経営の施政などにはもっぱら参与して、その才能と圭角をぽつぽつ現わし始めていたが、一日、曹操にこう進言した。（下略）（「剣と戟と楯」「図南の巻」）

しかし、外見描写が完全にされていない。彼の才能に言及しただけであった。司馬懿の外見に関する描写は、「李卓吾本」では第九十一回「孔明初上出師表」（『通俗三国志』六編巻之七「孔明初上出師表」）に「鷹視狼顧」としか書かれていなかった。吉川『三国志』（「出師の表」「出師の巻」）もこの言葉を受け継いだ。また、吉川氏が司馬懿の外見に関する加筆は、以下の一箇所のみで見ら

れない。

「郭淮。何しに見えられたか」

と、その辺りから声がするのでよく見ると、まぎれもない司馬懿仲達が、櫓(やぐら)の高欄(こうらん)に倚って、疎髯(そぜん)を風になぶらせながら、呵々(かか)と大笑しているではないか。

郭淮は大いに驚き、心ひそかに、われ到底この人に及ばずと、内に入って対面を遂げ、心服をあらわして敬拝した。(「高楼弾琴」「五丈原の巻」)

吉川氏が司馬懿を老人として描こうとする意図と合わせて考えてみれば、司馬懿が老人だから疎髯を持っているとして描いている可能性が高い。

2.2.2.1.2. 司馬懿像に対する加筆

『三国志演義』の前半には、司馬懿が基本的に登場していなかったが、曹操・劉備の死後、魏の兵権を握る重要人物として登場した。吉川『三国志』「五丈原の巻」から諸葛亮の侵攻を防ぐ有能な軍師として重要な役割を果たした。その時、誰かいま国を救う者はなきや、と憂いにみちて云った魏帝曹叡に勧められた人物として登場したのは司馬懿である。「五丈原の巻」では、この司馬懿と諸葛亮の互角をテーマにしている。「李卓吾本」第九十五回「司馬懿計取街亭」では、諸葛亮の戦略を推測している司馬懿が以下のように描かれた。

於是司馬懿引二十萬軍出關下寨，請先鋒張郃至帳下曰：「吾平生素知汝忠勇，故在天子前保舉，以退蜀兵，非同小可。諸葛亮乃當世之英雄，用兵如神，天下之人無不畏之。見屯兵於祁山，聲勢甚大，不作準備者，欺曹子

丹無謀也。他不知吾來。吾今先算下地理有十餘處，皆峻險僻靜之路。諸葛亮平素謹慎仔細，不肯造次行事，他卻不知吾境內地理；若是吾用兵，先從子午谷逕取長安，早得多時矣。他非無謀，但怕有失，不肯弄險，必然軍出斜谷，來取郿城也；若取郿城，必分兵兩路，一軍取箕谷矣。此二處，吾發檄文令子丹拒守郿城，若兵來不可出戰；令孫禮、辛毗截治箕穀道口，若兵來則出奇兵擊之。此萬全之計也。」

また、『通俗三国志』六編巻之九「仲達計取街亭」の中では、「数度(すと)の戦(たたか)ひに打勝(うちかつ)て。諸軍(しょぐん)の心みな驕(おご)り怠(おこた)り。却(かえつ)てわがめし返(かへ)されて。向(むかふ)ことしらず。」という一句が加筆された。吉川『三国志』では、この句を引用しなかったが、基本的に『通俗三国志』をありのままに引き継いだ。しかしここには氏の創意がいくつか見られる。

その張郃を、帷幕へ招いて、仲達は、

「いたずらに敵をたたえるわけではないが、この仲達の観るかぎりにおいて、孔明はたしかに蓋世がいせいの英雄、当今の第一人者、これを破るは実に容易でない」

と、今次の大戦を前に、心からそう語って、さてそのあとで云った。

「――もし自分が孔明の立場にあって、魏へ攻め入るとすれば、この地方は山谷険難(さんこくけんなん)、それを縫う十余条の道あるのみゆえ、まず子午谷(しごこく)から長安へ入る作戦をとるであろう。――だがじゃ、孔明はおそらく、それを為すまい。なぜならば従来の戦争ぶりを見ると、彼の用兵は実に慎みぶかい。いかなる場合も、絶対に負けない不敗の地をとって戦っておる」

彼の言は、孔明の心を、掌(てのひら)にのせて解説するようだった。英雄、英雄を知るものかと、張郃は聞き恍(ほ)れていた。(「高楼弾琴」「五丈原の巻」)

まず、好敵手としての司馬懿と諸葛亮をわざと張郃の考えを通じて強調した。また、「用兵如神，天下之人無不畏之」という諸葛亮に対する賞賛が消され、「これを破るは実に容易でない」という諸葛亮に匹敵できる司馬懿の発言に変えられた。また、「～じゃ」という、老人としての言葉遣いがわざと使われる。これは多分司馬懿には老練なイメージが付きまとっているからのであろう。実際司馬懿は諸葛亮より二歳年長だけであった。

また、「李卓吾本」第九十七回「孔明再上出師表」では、以下のエピソードがあり、

須臾，司馬懿引兵而還，眾將接入，問曰：「曹都督兵敗，即元帥之干係，何故急回耶？」懿曰：「吾料諸葛亮知吾兵敗，必乘虛來取長安也。倘隴西緊急，何人救之？吾故回耳。」眾皆以為怯懼，哂笑而退。

これは『通俗三国志』六編巻之十「孔明再上出師表」では、「われ量(はかる)に味方(みかた)。呉(ご)の勢(せい)に破(やぶ)られぬときこへば。孔明(こうめい)かならず虚(きよ)にのつて。長安(ちやうあん)へ攻来(せめきた)らん。」と司馬懿の発言に対して少し解釈を加えた。吉川『三国志』でも、『通俗三国志』のこの解釈を引き継いだ。さらに聞くものの笑いに対して気にしない司馬懿として描かれた。

しかしこういう毀誉褒貶(きよほうへん)を気にかける司馬懿でもない。彼は彼として深く信ずるものあるが如く、折々、悠々と朝に上り、また洛内(らくない)（らくない）

に自適していた。(「二次出師表」「五丈原の巻」)

この自適している司馬懿の描写は吉川『三国志』にしかないものであり、吉川氏独特な創意である。さらに以下のように、自適している司馬懿の姿勢を褒める章段さえも吉川氏が作った。

呉の境から退いて、司馬懿(しばい)が洛陽(らくよう)に留っているのを、時の魏人は、この時勢に閑を偸(ぬす)むものなりと非難していたが、ここ数日にわたってまた、(孔明がふたたび祁山(きざん)に出てきた。ために、魏の先鋒の大将は幾人も戦死した)

という情報が、旋風のように聞えてくると、仲達への非難はぴったりやんでしまった。やはり司馬懿仲達は凡眼でないと、謂(いわ)ず語らず、その先見にみな服したかたちであった。

どんな時にも、何かに対して、誹謗(ひぼう)やあげつらいの目標を持たなければ淋しいような一種の知識人や門外政客が洛陽にもたくさんいる。(「食」「五丈原の巻」)

ここでは、周囲に常に疑われてしまう司馬懿が組織の中で自己の意志をどう貫くかという問題に対する吉川氏自身の解釈であった。

また、自適のほかに、吉川氏が常に戒める司馬懿像を強化した。例えば、「李卓吾本」第百三回「孔明火燒木柵寨」では、「卻說司馬懿逃回本寨，心中甚惱。忽使命齎詔至，言東吳三路入寇，令懿等堅守勿失。懿受命已畢，深溝高壘，堅守不出」とあったところを、吉川『三国志』では以下のように書き換えられた。

さて、司馬懿は、日頃、ふかく戒めながら、またも孔明の策略にかかって、おびただしい損傷を自軍にうけたが、

「これは、よくよく考えると、孔明の計に乗るというよりは、毎度、自分の心に惑って、自ら計を作っては、その計に乗っているようなものだ。孔明に致されまいとするなら、まず自分の心に変化や惑いを生じないように努めるに限る」と、まった

く自戒の内に閉じ籠って、ひたすら守勢を取り、鉄壁に鉄壁をかさねて、攻勢主義の敵に、手も足も出せないような策を立てた。(「ネジ」「五丈原の巻」)

なお、『晋書』では、司馬懿のことを「内忌而外寛。猜忌多權變（心の内では嫌っていても、外面は寛大な様子で、猜疑心が強く、いろいろな手段を使いまくる）[66]」と評した。それゆえ、『晋書』では司馬懿には「狼顧の相」があるという。狼顧とは、狼が頭を背中のほうに向けられることを指している。また、狼が常に背後を警戒していることの形容でもあり、司馬懿はいつも用心深く周囲を警戒していることを暗示している。それを受け継ぎ、『三国志演義』では「鷹視狼顧（鷹のような眼差し、狼のような用心深さ)」となった。しかし、吉川『三国志』では誹謗に気にせず、戦いに対しては用心深い人に書き換えられ、この描写から吉川氏は司馬懿を底本より高く評価しているとも見える。

また、吉川『三国志』では、諸葛亮の死を予測した司馬懿がそういう戒めな態度と正反対に、興奮的に出兵をしようとした。

人々は急に息をひそめた。敵ながらその人亡しと聞くと何か大きな空う

[66] 渡辺精一『三国志人物鑑定事典』東京：学習研究社、1998 年、157

つろを抱かせられたのである。仲達もまさにその一人だったが、老来いよいよ健(けん)なるその五体に多年の目的を思い起すや、勃然(ぼつぜん)と剣を叩いて、

「蜀軍に全滅を加えるは今だ。――準備を伝えろ。総攻撃を開始する」

司馬師、司馬昭の二子は、父の異常な昂奮に、却(かえっ)て二の足をふんだ。

「ま。お待ちなされませ」

「なぜ止めるか」

「この前の例もあります。孔明は八門遁甲(とんこう)の法を得て、六丁(ちょう)六甲(こう)の神(しん)をつかいます。或いは、天象に奇変を現わすことだってできない限りもありません」(「死せる孔明、生ける仲達を走らす」「五丈原の巻」)

このエピソードは底本の「李卓吾本」第一百四回「死諸葛走生仲達」や『通俗三国志』七編巻之五「死孔明走生仲達」では、

卻說司馬懿知孔明身死，急起大兵追之。方出寨門，忽然自省，乃與二子曰：「孔明善會六丁六甲遁法，今見吾久不出戰，故以此術詐死，誘我追之。今若追趕，必中計矣！」

というように、自分で出兵を戒める司馬懿として描かれたが、吉川『三国志』では却って二人の子が老父を止めたことになっている。この描写によって、諸葛亮の死が司馬懿の精神をどれくらい興奮させたかを読者に伝わり、一種のドラマ的な緊張感を作り上げた。

2.2.2.1.3. 司馬懿像が持つ意義

司馬懿が諸葛亮と対抗する姿勢は、よく前半で諸葛亮と対抗する周瑜を想起させるが、伊波律子（1994）は以下のように指摘した。

> 『演義』の世界で、司馬懿のキャラクターもまた周瑜に劣らず、諸葛亮の引き立て役として機能していることは明らかである。（中略）こうして司馬懿は諸葛亮とセットで組み合わされるが、同じ役回りの周瑜と異なり、天文に通暁するなど、一種の超能力者だとされている点が注目される。（中略）総じて『演義』の司馬懿のイメージには、超能力の片鱗も付与されなかった周瑜とはあきらかに異質なものがある。[67]

また、吉永壮介（2013）は、

> 司馬懿については、諸葛亮に翻弄されるという点では、周瑜同様に道化的な役割を担わされている。しかしその一方で、諸葛亮の侵攻を防いだという歴史的事実が、諸葛亮に次ぐ異能者であることを司馬懿に要請した。（中略）周瑜とは異なり、自分は諸葛亮には及ばないとしばしば素直に感嘆する姿ともあわせて、思い込みや慢心ではない精度の高い笑いが許された少数ない人物のひとりである。その意味では、『演義』における司馬懿は真の道化役ではない。[68]

と述べていた。つまり、両氏とも司馬懿が諸葛亮の引き立て役であることを認めたが、完全に道化的な役ではないと述べている。確かに「空城の計」や「死せる孔明・生ける仲達を走らす」などの場面では、司馬懿があくまでも諸葛亮を引き立てるためのような存在に見える。『三国志演義』には「君才時倍曹丕。

[67] 伊波律子『三国志演義』東京：岩波書店、1994 年、175
[68] 吉永壮介「『三国志演義』の「笑い」の位相について」『藝文研究』104、東京：慶應義塾大学藝文学会、2013 年、37-54

必能安國。終定大事(君の才は曹丕に十倍す。必ず能く国を安んじ、終に大事を定めん)」という劉備が諸葛亮に語っているように、もし諸葛亮が死ななければというニュアンスが全体的に漂っている。

吉川『三国志』でも司馬懿を諸葛亮の引き立て役という枠から解放しなかったが、他人の言論に影響されない自適していることも描かれた。その穏やかな性格はどちらかというと肯定的に見えるので、吉川氏は司馬懿を肯定的に捉えているともいえよう。

2.2.2.2. 諸葛亮

2.2.2.2.1. 諸葛亮の初登場と容貌描写

諸葛亮の外見について、『三国志演義』では、第三十八回に諸葛亮が登場した時に初めて言及したが、吉川氏はこの第三十八回を待たずに、「諸葛氏一家」という章を立てて、諸葛亮の出身を描いた。またこの章でも、諸葛亮の外見について述べた。それは以下のようなものである。

> 彼の身丈(みのたけ)は、人なみすぐれていた。肉はうすく、漢人特有な白皙(はくせき)長身であった。(「諸葛氏一家」「孔明の巻」)

また、その眸には気概があると描かれている。

> 世を愛するために、身を愛した。世を思うために、自分を励ました。
>
> 口にこそ出さないが、膝を抱えて、黙然、うそぶいている若い孔明の眸にはそういう気概が、ひそんでいた。(「諸葛氏一家」「孔明の巻」)

諸葛亮の初登場は、「李卓吾本」では第三十八回「定三分亮出茅蘆」に書かれた。それは以下のようにある。

孔明轉入後堂，整衣冠出迎玄德。玄德見孔明，身長八尺，面如冠玉，頭戴綸巾，身披鶴氅，眉聚江山之秀，胸藏天地之機，飄飄然當世之神仙也。

吉川『三国志』ではさらに、

玄徳はまず彼の語韻（ごいん）の清々（すがすが）しさに気づいた。低からず、高からず、強からず、弱からず、一語一語に、何か香気のあるような響きがある。余韻がある。

すがたは、坐していても、身長（みのたけ）ことにすぐれて見え、身には水色の鶴氅（かくちょう）を着、頭には綸巾（りんきん）をいただき、その面は玉瑛（ぎょくえい）のようだった。

たとえていえば眉に江山の秀をあつめ、胸に天地の機を蔵し、ものいえば、風ゆらぎ、袖を払えば、薫々（くんくん）、花のうごくか、嫋々（じょうじょう）竹そよぐか、と疑われるばかりだった。（「立春大吉」「孔明の巻」）

「香気のある」・「薫々、花のうごくか、嫋々竹そよぐか」というような比喩を用いて諸葛亮の行動を描いた。これは吉川『三国志』の他の人物と全く異なる描写手法である。また、「李卓吾本」第四十三回「諸葛亮舌戰群儒」にある「張昭等見孔明有飄飄然出世之表，昂昂然有凌雲之志」というところは、吉川氏の筆の下に「その挙止は縹渺（ひょうびょう）、その眸は晃々（こうこう）、雲をしのぐ山とも見え、山にかくされた月とも思われる（「舌戦」「赤壁の巻」）」というように山と月に例えられた。類のない外見を持つ諸葛亮が描かれた。

2.2.2.2.2. 諸葛亮の死の描写

諸葛亮の死は、『三国志演義』の一百四回で描かれた。「李卓吾本」第一百四回の「孔明秋夜五丈原」が以下のように彼の死を描写した。（また、下の文の次に九つの賛が並べられた。）

是夜，孔明令人扶出，仰觀北斗，遙指之曰：「此吾之將星也。」眾視之，只見其色煌煌欲墜。孔明以劍指之，口中唸咒。咒畢，急回帳時，不醒人事。忽李福又到，見孔明昏絕，口不能言，乃大哭曰：「我誤國家大事也！」須臾，孔明復醒，開目視之，見李福立於榻前。孔明曰：「公此一來，必是天子問誰可任大事？蔣公琰可矣。」福曰：「公琰倘不在，誰可繼之？」孔明曰：「費文偉可以繼之。」福欲又問，孔明不答而逝。時建興十二年秋八月二十三日也，壽五十四歲。（中略）是夜，天愁地慘，月色無光，孔明奄然歸天。

ここで見られるのは、道術を使う諸葛亮であり、確かに今の視点から見れば、哀れな最後に見えず、不合理なエピソードになっている。それで吉川氏が、その不合理的な部分を取り除き、一人間の死に焦点を絞った。

たそがれ頃、一時、息絶えたが、唇に、水をうけると、また醒(さ)めたかのごとく、眼をみひらいて、宵闇の病床から見える北斗星のひとつを指さして、

「あれ、あの煌々(こうこう)とみゆる将星が、予の宿星である。いま滅前の一燦さんをまたたいている。見よ、見よ、やがて落ちるであろう……」

いうかと思うと、孔明その人の面は、たちまち白蝋の如く化して、閉じた睫毛のみが植え並べたように黒く見えた。

黒風一陣、北斗は雲に滲んで、燦また滅、天ただ啾々の声のみだった。（「秋風五丈原」「五丈原の巻」）

これらから天の意に敵わない人間の意志の切なさが伝わってきた。また、「黒風一陣、北斗は雲に滲んで、燦また滅、天ただ啾々の声のみだった」という描写は、底本のから引き継いだ描写であったが、「曹操の死は天下の春を一時寂闇にした」という吉川『三国志』の描写を想起させた。

なお、李福が来て、諸葛亮がまた目を覚めた描写について、吉川氏も解釈を付け加えた。

とまれ諸葛孔明の死に対しては、当時にあってもその蜀人たると魏人たるを問わず、何らか偉大なる霊異に打たれたことは間違いなく、そして原三国志の著者までが、何としても彼を敢えなく死なすに忍びなかったようなものが、随所その筆ぶりにもうかがわれるのである。（「秋風五丈原」「五丈原の巻」）

紙幅を尽くして諸葛亮の死を描写する吉川氏の重視が伺える。

2.2.2.2.3. 諸葛亮像に対する加筆

吉川氏が諸葛亮に対する加筆は多くないが、おもに、諸葛亮の感情描写に集

中していた。例えば、曹操を殺さなかった関羽に対して、「李卓吾本」第五十回「關雲長義釋曹操」では、

孔明曰：「此是雲長想曹操昔日之恩，故意放了。昔日斬丁麽，封薤齒，所以正軍法也。王法乃國家之典刑，豈容人情哉！既已責下令狀，罪不能免，推出斬之，以正軍法！」

としか描かれていないところは、吉川『三国志』では以下のように変えられた。

孔明がこれほど心から怒ったらしい容子を見たのは、玄徳も初めてであった。

めったに怒らない優しい人が怒ったのは、ふつうの者の間でも恐ろしい気がするものである。いわんや軍師の座にあって、謹厳おのれを持(じ)していやしくもせず、日頃はあまり大きな声すら出さない孔明が、断乎、斬れ！と命じたのであるから、人々みな慄然(りつぜん)とすくみ立って、どうなることかと思っていた。（「功なき関羽」「望蜀の巻」）

また、「李卓吾本」第九十五回「司馬懿智取街亭」では、感情について全然描かれていなかった部分が、吉川『三国志』では、諸葛亮が戦死した親友の子の馬謖の才器を鍾愛するあまりに、劉備の忠告さえ忘れるというように描かれた。

故玄徳は、かつて孔明に、

（この子、才器に過ぐ、重機に用うるなかれ）といったが、孔明の愛は、いつかその言葉すら忘れていた程だった。そして長ずるや馬謖の才能はい

よいよ若々しき焼発(かんぱつ)を示し、軍計、兵略、解せざるはなく、孔明門第一の俊才たることは自他ともにゆるす程になってきたので、やがての大成を心ひそかに楽しみと見ているような孔明の気持だったのである。

――で今。

その馬謖(ばしょく)からせがまれるような懇望を聞くと、彼は丞相たる心の一面では、まだちと若いとも思い、まだ重任過ぎるとも考えられたのであるが、苦しい戦と強敵にめぐり合わせるのもまた、この将来ある人材の鍛錬であり大成への段階であろうとも思い直し、その機微な心理のあいだに、自己の小愛がふとうごいていたことは、さしもの彼も深く反省してみるいとまもなく、つい、

「行くか」

と云ってしまったのである。(「高楼弾琴」「五丈原の巻」)

以上の描写を通じて、『三国志演義』で神格化されていた諸葛亮も初めて人間性を持つようになってきた。

また、司馬懿の出廬を聞いた諸葛亮の反応はそれぞれの版本で描写が異なっている。「李卓吾本」第九十四回「司馬懿智擒孟達」では以下のように描いた。

孔明大喜，厚賞李豐等。忽細作人報說：「魏主曹叡，一面駕幸長安；一面詔司馬懿復職，加為平西都督，起本處之兵，於長安聚會。」孔明聽畢，頓手跌足，不知所措。參軍馬謖問曰：「量曹叡何足為道？若得來長安，就而擒之，丞相何故驚也？」孔明曰：「吾豈懼曹叡耶？平生所患者，獨司馬懿一人而已。今孟達欲舉大事，若司馬懿得此大權，事必敗矣！達非司馬懿之對手，必被所擒。孟達若死，中原不易得也！」

とくに諸葛亮の「頓手跌足，不知所措」という表現が、『通俗三国志』六編巻之九「司馬仲達擒孟達」では「大におどろき。首を低て色を失なふ」と描かれ、「中原不易得也」もまた「魏を討となりがたし」に変わった。吉川『三国志』（「鶏家全慶」「五丈原の巻」）は『通俗三国志』のこの描写を受け継ぎ、

（前略）聞くと、愕然、

「……なに、司馬懿を」

孔明は首を垂れて、その酔色すらいちどに褪せてしまった。（「鶏家全慶」「五丈原の巻」）

というように酔いが醒めたのを底本よりリアルな表現で用いられた。面白いのは、『毛本』第九十四回「諸葛亮乘雪破羌兵 司馬懿劾日擒孟達」ではただ「孔明大驚」として描かれ、諸葛亮の感情表現が消さられた。

しかし、諸葛亮の人間性が改編に連れて消せられた例もある。それは後述する周瑜の死を知った時の諸葛亮の反応である。すなわち、どの版本の作者も、諸葛亮のいい方面を突き出すために、却って諸葛亮の多面性を犠牲したともいえよう。

2.2.2.2.4. 諸葛亮像が持つ意義

彼らは諸葛亮を極力描写した。しかし、彼らの理想では諸葛亮は「知謀にたける」ことしか知らないから、諸葛亮を風と星を祭り、神算鬼謀の道士にしてしまった。（翻訳は筆者）

と胡適（1922）[69]が言っているように、後世の学者たちは羅貫中の諸葛亮の造形に対して不満を抱いている。実際、『晋書』の中では司馬懿が諸葛亮のことを「亮志大而不見機。多謀而少決。好兵而無權（亮は志大なれども機を見ず、謀多けれども決少なく、兵を好めども権なし）」と評し、陳寿も諸葛亮のことを「亮才於治戎為常。奇謀為短。理民之幹。優於將略（亮の才は治戎において長ずと為し、奇謀をば短と為し、民を収むるの幹は、将略に勝る）」と評した。つまり、歴史書の評論から見れば、みんなが彼の才能を絶賛するばかりではない。

しかし、『三国志演義』は平話の虚構を元にしたので、その影響で封建社会の中にある智謀に富んだ典型として諸葛亮が描かれた。それで、この「諸葛才絶」のように典型化された人物像が後世の学者たちに多くの批評を受けたのも仕方あるまいが、逆に考えると、このような諸葛亮像は当時の読者にとって、浪漫に富んで魅力を溢れている典型であろう。

吉川『三国志』の諸葛亮像について邱岭、呉芳齢（2006）が「諸葛亮に対し、多分羅貫中と同様な褒揚態度を持っているから、吉川英治は『演義』の中の諸葛亮の登場や退場に対して手を多く加えてなおしていなかった（翻訳は筆者）」[70]と述べた。確かに吉川氏は諸葛亮を愛し、そしてこの諸葛亮に人間性を与えた。吉川氏自身も諸葛亮について以下のように述べている。

> もちろん彼も人間である以上その性格的短所はいくらでも挙げられようが、――それらの八面玲瓏（れいろう）ともいえる多能、いわゆる玄徳が敬愛おかなかった大才というものはちょっとこの東洋の古今にかけても類のすくな

[69] 「『三國演義』序」1922 年、『胡適、魯迅等解讀『三國志演義』』、瀋陽：遼海出版社、2002 年 6 月に収録、6。

[70] 邱岭、呉芳齢『三國演義在日本』、銀川：寧夏人民出版社 2006 年、188
原文：對諸葛亮，或是因與羅貫中持同樣的褒揚態度，吉川英治未對『演義』中諸葛亮的出場或退場多作修改

い良元帥であったといえよう。（中略）

とはいえ、彼は決して、いわゆる聖人型の人間ではない。孔孟の学問を基本としていたことはうかがわれるが、その真面目はむしろ忠誠一図な平凡人というところにあった。（「諸葛菜」「篇外余録」）

その態度をもとに、血肉を底本より富む諸葛亮像が作り上げられた。たとえば「出師の巻」の「魚紋」では、司馬懿の五路作戦に防ぐ術を悩む諸葛亮の姿が描かれているのも吉川氏の造形態度に由来している。

また、造形態度というと、吉川氏の孔明謳歌があきらかに感じられる。前述のとおり司馬懿を引き立て役にした点や、諸葛亮が登場してから曹操に対する悪評が出るのもその孔明謳歌の現れである。また、諸葛亮の死を以て作品を終わらせるのも、吉川氏がいかに諸葛亮を愛している証である。

ゆえに原書「三国志演義」も、孔明の死にいたると、どうしても一応、終局の感じがするし、また三国争覇そのものも、万事休む――の観なきを得ない。

おそらくは読者諸氏もそうであろうが、訳者もまた、孔明の死後となると、とみに筆を呵す興味も気力も稀薄となるのを如何ともし難い。これは読者と筆者たるを問わず古来から三国志にたいする一般的な通念のようでもある。

で、この迂著三国志は、桃園の義盟以来、ほとんど全訳的に書いてきたが、私はその終局のみは原著にかかわらず、ここで打ち切っておきたいと思う。即ち孔明の死を以て、完尾としておく。（「諸葛菜」「篇外余録」）

吉川氏の諸葛亮に対する謳歌はどこから来るかというと、諸葛亮はその一生を通じて、若頃の誓いとその臣道をずっと守ってきたからである。すなわち、諸葛亮の一生には永久的な生命価値があるという。

2.2.2.3. 周瑜

2.2.2.3.1. 周瑜の初登場と容貌描写

周瑜の登場に関して、吉川『三国志』ではそのまま底本の「行至歴陽。正行之際。見一軍到。當先一人。見策下馬」という場面を引き継ぎ、さらに会話や行動によって二人の中のいい関係を描いた。それは以下のような場面である。

> 暦陽（江西省）のあたりまで来ると、彼方から一面の若武者が来て、
> 「おっ、孫君」と、馬を下りて呼んだ。
>
> 見れば、姿風(しふう)秀麗、面は美玉のごとく、年頃も孫策と同じくらいな青年だった。
>
> 「やあ、周君か。どうしてここへ来たか」
>
> なつかし気に孫策も馬を下りて、手を握り合った。(「大江の魚」「草莽の巻」)

一方、諸葛亮の「胸藏天地之機」という初登場の描写を思い出させる「李卓吾本」第十五回「孫策大戰太史慈」や、『通俗三国志』二編巻之一「孫策大戦太史慈」にある「唇若點朱。姿質風流。儀容秀麗。胸藏經天緯地之才。腹隱安邦定國之謀。」という描写が消さられた。

2.2.2.3.2. 周瑜の死の描写

周瑜の死の描写に関しても、底本では、

周瑜覽畢，長嘆一聲，喚左右取紙筆，作書上吳侯。乃聚眾將曰：「吾非不欲盡忠報國，奈何天命絕矣。汝等善事吳候，共成大事。」言訖，昏絕。徐徐又醒，仰天大嘆曰：「既生瑜，而何生亮！」連叫數聲而亡。壽三十六歲。時建安十五年冬十二月初三日也。

というように、嘆き叫ぶ周瑜を一見感嘆的に描いたが、他の将にくらべて、わりと多くの紙幅を使って描写した。また、周瑜を賞賛する七つの評論を彼の死の描写の後ろに並べてた。『通俗三国志』四編巻之六「孔明三気死周瑜」ではさらに周瑜が「恨気胸に塞（こんきむねふさが）」った様子が描かれた。吉川『三国志』では、この「恨気胸に塞」ったイメージから、周瑜の死ぬ時に狼狽えている姿を生き生きと加筆した。

読み下してゆくうちに、周瑜は恨気（こんき）胸にふさがり、手はわななき、顔色も壁土のようになってしまった。

「ううむっ……」と、太く、苦しげに、長嘆一声すると、急に、

「筆、筆、筆。……紙を。硯（すずり）を」

と、さけび、引ったくるように持つと、必死の形相をしながら、なにか懸命に書き出した。文字はみだれ、墨は散り、文は綿々と長かったが、遂に書き終るや否、筆を投げて、

「ああ、無念っ……無情や人生。皮肉なることよ宿命……。天すでに、この周瑜を地上に生ませ給いながら、何故また、孔明を地に生じ給えるや！」

云い終ると、昏絶して、一たん眼を閉じたが、ふたたびくわっと見ひらいて、

「諸君。不忠、周瑜はここに終ったが、呉侯を頼む。忠節を尽して……」

忽然、うす黒い瞼を落し、まだ三十六歳の若い寿(とし)に終りを告げた。時、建安十五年の冬十二月三日であったという。(「荊州往来」「望蜀の巻」)

これと対照に、諸葛亮が周瑜の死を知った反応として、「李卓吾本」では「卻說孔明未知瑜喪於巴丘，夜觀天文，見將星墜地，乃笑曰：『周瑜死矣。』」として描き、『通俗三国志』四編巻之六「孔明三気死周瑜」でも、「すなはち大に笑(わら)ひ。周瑜いま死(し)せりとて」としていたが、吉川『三国志』ではこの描写が消された。吉川氏が諸葛亮にとって悪いイメージと思しき描写を消した氏の意図が伺える。また、この大笑いの描写がなくなることにより、後に諸葛亮が泣くこの底本にもある文章が却って諸葛亮の懇意につながり、諸葛亮の悲しみを演技ではなく、心からの悲しみとして捉えることができる。

(弔文を)読み終ると、孔明は、ふたたび地に伏して大いに哭(な)き、哀慟(あいどう)の真情、見るも傷ましいばかりだったので、並びいる呉の将士もことごとく貰い泣きして、心ひそかに、皆こう思った。

(周瑜と孔明とは、たがいに仲が悪く、周瑜はつねに孔明を亡き者にしようとし、孔明もまた周瑜に害意をふくんでいると聞いていたが、……この容子ではまるで骨肉の者と別れたような嘆き方だ。察するところ、周瑜の死は、まったく孔明のためではなく、むしろ周瑜自身の狭量が、みずから求めて死を取ったものだろう。どうもそれでは致し方もない……)(「鳳雛去る」「望蜀の巻」)

周瑜の死は、吉川『三国志』で却って道化的な役割を果たさせた感がある。

2.2.2.3.3. 周瑜像に対する加筆

吉川氏『三国志』では、周瑜の諸葛亮に対する恨みがいつも強化されている。例えば、「李卓吾本」第五十七回「諸葛亮大哭周瑜」では、

> 瑜大怒，咬牙切齒而言曰：「你道我取不得西川，吾誓取之！」正恨間，人報吳侯遣宗弟孫瑜到。周瑜接入，盡言其事。孫瑜答曰：「吾奉兄命，助都督一臂之力。」遂令催前軍。行至巴丘，人報上流有軍，截住水路，乃劉封、關平也。周瑜愈怒。忽又人報孔明遣人送書至。

周瑜の抑えきれない感情に関する描写は「大怒，咬牙切齒」、「正恨」、「愈怒」という三つの言葉で彼の怒りを現したが、吉川『三国志』では、

> しかし、周瑜はなお、身の苦痛など口にも出さない。火の如き憤念を吐いて、
>
> 「誓って、荊州を取り、玄徳、孔明の首を見なければ、なんの顔(かんばせ)をもって呉侯にまみえよう」
>
> 血涙をたたえて云った。
>
> 孫瑜(そんゆ)は、その激越を気づかってわざと相手にならない。そして直ちに病輿(びょうよ)を命じて彼を乗せ、ひとまず夏口の船場まで退くことにした。
>
> その途中である。巴丘(はきゅう)という所まで来ると、彼方に荊州の一軍が江頭の

道を切りふさいだという。物見を放ってうかがわせると、関羽の養子関平（かんぺい）と劉封（りゅうほう）の二将が、

「周瑜来らば――」と、虎を狩るように、厳しく陣をめぐらしているとある。

周瑜は聞くと、輿（こし）の中で、身をもがいて叫んだ。

「降ろせっ。輿の中よりわしを出せ。猪口才（ちょこざい）な孔明の手先、蹴ちらして通る」

けれど病輿（びょうよ）はどんどん道をかえてほかの方向へ走っていた。孫瑜の命令で、夏口にある船の一艘をべつな江岸へ呼び、そこから辛うじて周瑜の身を船へ移した。

するとそこへ、荊州の軍使と称する者がきて、一書を、周瑜へ渡して去った。――見れば孔明の手蹟である。（「荊州往来」「望蜀の巻」）

下線のように、読者も気の毒になるくらいに怒り狂った周瑜を描写した。

2.2.2.3.4. 周瑜像が持つ意義

柏宏軍・姚東霞（2008）は、以下のように言った。

『三國志』における周瑜のイメージは完璧である。仕官の家に生まれ、資質風流であり、文武両道にたけ、曲の芸にも精通している。烽火の連綿たる乱世の中では彼の抜群な才気がなお際立ち、孫策を助け江東を定め、謀士でありながら武将であり、孫策とそれぞれ大喬と小喬を嫁にし、千古の佳話として伝えられた。赤壁の戦いで、なおさらその名を天下の轟かし

た。[71]

しかし、陳寿によると「性度揮廓」とある周瑜が、『三國志演義』では器量の狭い人物として描かれた。もちろん、羅貫中が周瑜の傑出の軍事才能をも描いたが、この器量の狭い性格を付け加えたことで、彼はあくまでも諸葛亮の智謀の引き立て役に過ぎないという。陳周昌（1986）[72]が彼を器量の狭い人物として描く原因を、キャラクターが諸葛亮に似ていれば、行動は矛盾と衝突で成り立たない。諸葛亮を美化するために、諸葛亮の性格と対比することにしたという。また、井波律子（1994）は、

> 異常な予知能力を持つ諸葛亮にキリキリ舞いさせられ、カンカンに腹を立てては矢傷が破れ、気絶を繰り返して衰弱してゆく周瑜のイメージは、哀れな道化以外のなにものでもない。（中略）周瑜の存在価値を切り下げることによって、相対的に諸葛亮の価値を引き上げようとする操作にほかならないのである。[73]

と周瑜の存在を捉えた。

吉川『三国志』では、さらに諸葛亮の価値を引き上げようとする人物として周瑜を道化的に描き、吉川氏の諸葛亮に対する愛着が周瑜像においても見られる。

---

[71] 柏宏軍・姚東霞『圖解三國演義』香港:中華書局、2008 年
原文：『三國志』中，周瑜的形象是完美的。他出生於官宦之家，資質風流，文武雙全，且精通曲藝。烽火連綿的亂世更顯其出眾才情，助孫策平定江東，既為謀士又為武將，與孫策分娶大小二喬，傳為千古佳話。赤壁一戰，更是名震天下。
[72] 陳周昌「論周瑜和魯肅」『三國演義學刊』（二）、成都：四川省社會科學院出版社、1986 年
[73] 伊波律子『三国志演義』東京：岩波書店、1994 年、170-172

結論

本論文は「吉川英治『三国志』とその底本の比較研究―人物像を中心に―」というテーマを二章に渡って取り扱ってきた。

第一章では、吉川『三国志』について概説するので、創作の際に使われた底本について検討した。そして、底本になる可能性のある湖南文山の『通俗三国志』と、久保天随の『新訳三国志』についても説明した。しかし、従来の研究によると、吉川氏が『三国志』を創作する際に、主に参考にしたのは『通俗三国志』なので、『通俗三国志』を今回取り扱う材料にした。また、『通俗三国志』は『李卓吾先生批評三国志』を底本にしたと言われている。なので、本論文では、「李卓吾本」、湖南文山『通俗三国志』、吉川『三国志』という三作品の描写を取り上げ、その相互関係を具体的に探求してみた。

第二章では、まず吉川『三国志』の成立と時代背景を見てきた。マス・メディアの発達によって発足した吉川氏は常に読者を意識しながら作品を創作した。故に、氏が書いた歴史小説でも、常に読者を意識しながら創作していた姿勢が見られる。氏の創作態度は、読者に物語を完全に信じさせるために、史実を把握してから推理した上、物語を創作した。『三国志』の創作においても、氏は時に歴史書を厳密に考証して物語を書き、時にはどの本にもよらずに空想を生かした。それは氏の言葉でいうと「歴史の余白」を生かすことであった。その方法として、作中人物を血肉の通った人間として描くことや、人物の骨肉愛と恋を描くことなどが挙げられる。特に、吉川文学では、母子関係がいつも濃く描かれている。この濃密な母子関係描写は実際に吉川氏の人生の反映かもしれない。また、読者には嘘だと感じさせないために、吉川『三国志』においては、「合理化」という手法が多用された。なお、歴史小説を用いて、氏が一番重視している「忠」と「孝」も読者たちに伝達しようとした。

時代背景について、吉川『三国志』は日中戦争期に書かれた作品であったので、吉川氏と日中戦争の関係を考察してみた。その時、吉川氏は毎日新聞社特派員として天津・北京と、また、ペン部隊の従軍部隊の一員として漢口・南京方面と、二度中国を訪れた。このような渡航経験は氏の『三国志』創作にどのような影響を与えたのであろうか。吉川『三国志』の序文の原文を見れば、日中戦争と中国に対する関心の高揚の結果として、吉川『三国志』の執筆の念を固めたことと、日中戦争を背景にした吉川『三国志』の出版意図の二点が分かった。実際、吉川氏は積極的にファシズムに加担したと評され、日中戦争期に書かれた文章でも、日本を東洋の盟主とした氏の観念が伺える。しかし、一見ではこのような戦争思想は吉川『三国志』の中に持ち込まれず、その中国体験は作中の難民描写や、景物描写の基調となった。しかし、天意と王覇の思想を語った部分では、従来の底本になかった「王道」のためなら、一部の殺戮は許されるという観念も語られた。これは、吉川氏がその序文の中で言及した「興亜」・そして氏が日本を東亜盟主とした観念を想起させざるを得なかった。それゆえ、氏が意識的にか、無意識的にか、戦争思想を『三国志』に埋め込んだことがわかった。

吉川『三国志』の人物像創作に関して、魏・蜀・呉の主君と軍師の人物像をそれぞれ一人ずつ分析してきた。

曹操に関して、吉川氏が曹操の描写に力を注いでいるように見える。故に、彼の死の描写も、底本の態度と違い、まるで偉人が世を去ったように描写された。また、氏は曹操の優れた政治力と軍事力を称え、詩情豊かな人として曹操を捉えていた。このように吉川氏が作り上げたのは、英雄のキャラクターを持っている曹操像であった。しかし、物語の推進に連れて、曹操に対する悪評もどんどん増えてきた。永久的な生命価値を重視する吉川氏の態度が伺える。

劉備に関しての人物像描写は曹操と対照的に見える。しかし、劉備の死の場面において吉川氏が加筆しなかった点から、吉川氏が劉備描写にそれほど力を入れていないようにも見える。また、氏の劉備造形は、『三国志演義』と同じく、「仁徳」・「人材を求める」・「微温的な性格」という三点にとどまっているので、その人物像も蒼白になってしまう。しかし、氏は劉備の性格にある両面性を発見した。

孫権に関してはあまり加筆していなかった。ただ「血気強暴」というイメージを用いて孫権を描写した。他の人物に比べて吉川氏が孫権に対する無関心が伺える。

司馬懿に関して、吉川氏は『三国志演義』の「鷹視狼顧」という描写を受け継いだ上に、「疎髯」という老人のイメージを司馬懿に与えた。また、他人の言葉を気にせず常に自適している司馬懿像を作り上げた。性格描写から見ると吉川氏は司馬懿を肯定的に捉えているとも言える。

諸葛亮に関して、吉川氏は類のない外見を持っている諸葛亮を描いた。そして、紙幅を尽くしてまで諸葛亮の死を描写する点からも、吉川氏の諸葛亮に対する愛着が伺える。氏が諸葛亮に対する加筆は多くないが、主に諸葛亮の感情描写に集中し、諸葛亮に人間性を与えた。しかし、諸葛亮のいい方面を突き出すために、却って諸葛亮の性格の多面性を犠牲にした。

周瑜に関しては彼の外見を加筆しなかった。また、死ぬ時の狼狽さや、諸葛亮に対する恨みを強く描いた結果、『三國志演義』以来道化的な役割が吉川『三國志』をもって最大化した。

総じて言えば、吉川氏の筆力は魏と蜀の人物に集中し、呉の人物に対する無関心が見られる。また、「三国志は曹操に始まって孔明に終る二大英傑の成敗争奪の跡を叙したものというもさしつかえない（「諸葛菜」「篇外余録」）」という氏の創作態度は、氏が曹操の外見描写を一番多く加筆し、また多方面から若

い頃の曹操を賛嘆してきた点と、諸葛亮のいいイメージを増強し、諸葛亮の精神を物語の最後までも称えた点から伺える。

総合的に考えると、吉川『三國志』には吉川氏の経験、または思想の反映が強く見られる。その歴史小説の創作手法は、氏の読者意識を反映し、そして中国観は、氏の渡航経験を反映した。また、中国の『三國志演義』の人物造形が反映したのは当時の「正統観念」や「愛劉憎曹」の観念なら、吉川『三國志』の人物造形が反映するのは、吉川氏一個人の物語に対する解釈であろう。そこで「痴ちや、愚や、狂に近い性格的欠点をも多分に持っている英雄として、人間的なおもしろさ（「諸葛菜」「篇外余録」）」を持っている曹操を好む氏は物語の前半において曹操の英雄的な活躍ぶりを描き、また忠の価値を高く評価した氏は物語の後半において諸葛亮の精神を謳歌した。

なお、前述した『三國志演義』「毛本」では、曹操を完全な悪役として扱ったのと異なり、『三國志演義』「李卓吾本」では、「愛劉憎曹」の観念がそれほど強くなく、劉備の方に傾いていたが、曹操を中立的に取り扱っている。それゆえ、「李卓吾本」を受け継いだ『通俗三国志』を底本にしていた吉川氏は、曹操の両面性を読み取る事ができて、曹操の活躍ぶりを絶賛した文章を書くことに到達した。これも「愛劉憎曹」の傾向が日本にはなかったこその読み取り方ではなかろうか。この視点から見れば、吉川氏の『三國志』はとても日本らしい『三國志演義』とも言えよう。また、『通俗三国志』では、「李卓吾本」を忠実に訳していたが、ところどころ原文を飛ばして訳していた。しかし、このような省略はあらすじに大きな影響を与えていなかったことから、吉川氏の『三國志』はやはり氏独特な創意によってできていると言えよう。

参考文献

テキスト

大橋新太郎編『校訂通俗三国志』（上）（下）東京：博聞館、1910 年
吉川英治『草思堂随筆』東京：新英社、1935 年
吉川英治『窓辺雑草』東京：育生社、1938 年
吉川英治『支那紀行』東京：第一書房、1940 年
吉川英治『折々の記』一家言叢書、全國書房、1942 年
吉川英治『折々の記』東京：六興出版、1953 年
吉川英治『忘れ残りの記』東京：文藝春秋新社、1957 年
小川環樹『中國小説史の研究』東京：岩波書店、1968 年
国立政治大学古典小説研究中心編『李卓吾先生批評三国志』(1) ～ (20) 台北：天一出版社、1985 年
吉川英治『三国志（一)』東京：講談社、1989 年 4 月
吉川英治『三国志（八)』東京：講談社、1989 年 5 月
吉川英治『三国志』（一）～（五）東京：講談社、2008 年

単行本

尾崎秀樹『伝記　吉川英治』東京：講談社、1970 年
松本昭『人間　吉川英治』東京：六興出版、1987 年
長谷川泉『日本文学新史〈現代〉』東京：至文堂、1991 年
伊波律子『三国志演義』東京：岩波書店、1994 年
中川諭『『三國志演義』版本の研究』東京：汲古書院、1998 年
渡辺精一『三国志人物鑑定事典』東京：学習研究社、1998 年
雑喉潤『三国志と日本人』東京：講談社、2002 年
邱岭、呉芳齢『三國演義在日本』銀川：寧夏人民出版社、2006 年
田中尚子『三国志享受史論考』東京：汲古書院子、2007 年 1 月
柏宏軍・姚東霞『圖解三國演義』香港:中華書局、2008 年

箱崎緑『日中戦争期における「三国志」ブームー中国は如何に語られたかー』東京：東京大学修士学位論文、2010 年

童華仁『從歷史教訓到文化消費ーー在日本「三國志」文本中變遷的中國』高雄: 国立中山大学修士学位論文、2011 年

論文

武蔵野次郎「歴史・時代小説の魅力」『国文学 : 解釈と鑑賞』第 44 巻 3 号、1979 年

尾崎秀樹「大衆文学の魅力」『国文学：解釈と鑑賞』昭和 59 年 12 月号、1984 年

傅隆基「從『三國演義』看歷史小說實與虛的藝術辯證法」『三國演義學刊』(一) 、成都: 四川省社會科學院出版、1985 年

劍鋒「論『三國演義』藝術的道德美」『三國演義學刊』(一) 、成都: 四川省社會科學院出版、1985 年

劉知漸「羅貫中為什麼要反對曹操——與郭老商榷」1959 年、『『三國演義』新論』に収録、重慶：重慶出版社、1985 年

陳周昌「論周瑜和魯肅」『三國演義學刊』（二）、成都：四川省社會科學院出版社、1986 年

余洪江「試論『三國演義』中的陸遜形象」『三國演義學刊』(二) 、成都市: 四川省社會科學院出版、1986 年

許建中「試論曹操的性格的二重組合——讀《三國志通俗演義》斷想之一」『三國演義學刊（二）』四川：四川省社會科學院出版社、1986 年

長尾直茂「江戸時代元禄期における『三国志演義』翻訳の一様相——『通俗三国志』の俗語翻訳を中心として——」『国語国文』66：8、京都：中央図書出版社、1997 年

長尾直茂「江戸時代元禄期における『三国志演義』翻訳の一様相・続稿」『国語国文』66：8、京都：中央図書出版社、1997 年

新保祐司・冨岡幸一郎「対談吉川英治と大佛次郎—歴史小説家と歴史家—」『国文学：解釈と鑑賞』66：10、東京：至文堂、2001 年

石川巧「権力の機構——『私本太平記』論」『国文学：解釈と鑑賞』66：10、

東京：至文堂、2001 年
立間祥介「吉川『三国志』の魅力」『国文学 ： 解釈と鑑賞』66：10、東京：至文堂、2001 年
松本昭「吉川英治の魅力」『国文学：解釈と鑑賞』66：10、東京：至文堂、2001 年
鈴木貞美「吉川英治の歴史観」『国文学：解釈と鑑賞』66：10、東京：至文堂、2001 年
傳馬義澄「吉川英治の女性感」『国文学：解釈と鑑賞』66：10、東京：至文堂、2001 年
「『三國演義』序」1922 年、『胡適、魯迅等解讀『三國志演義』』、瀋陽：遼海出版社、2002 年 6 月に収録
丸山浩「吉川英治と小林秀雄―「読者」「大衆」をめぐって―」山陽女子短期大学研究紀要 27、2005 年
邱岭「試論日本文學對《三國演義》的接受――以吉川英治《三國志》中的關羽形象為例」『福建師範大學學報』2006：3、2006 年
竹内真彦「泣かずに魏延を焼き殺す--吉川英治の読んだ三国志」『アジア遊学』105、東京：勤勉出版 2007 年
謝立群・張永「『三国志』對『三国演義』中人物形象的塑造」『北京第二外國語學院學報』2011:12 、北京: 北京第二外國語學院學報、2011 年
江尚軍「吉川英治『三國志』と『三國志演義』の比較――曹操像を中心に」『西江月』2013：2、重慶：重慶大學外國語學院、2013 年
王米娜「談吉川英治「三國志」中的劉備形象」黑龍江：『北方文學』、2013 年
吉永壮介「『三国志演義』の「笑い」の位相について」『藝文研究』104、東京：慶應義塾大学藝文学会、2013 年